針葉樹会報

第 131 号
2014 年 11 月

目次

羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳
～北海道山行シリーズ～……岡田　健志　2
盛夏の白山～花の山旅……中村　雅明　5
白山の花～チブリ尾根下山……川名　真理　11
沢・渓・川 ＝山登り50年の断想……藤原　朋信　12
上越後の山、海、風土……加藤　博行　14
山岳地図集『ヒマラヤの東
―チベットのアルプスとその彼方』について
……中村　保　18
会員山行記録……本間　浩　20
三月会通信……22
一橋山岳部コーナー……長島　弘賢　28
会務報告……高崎　俊平　31
会員の近況報告……36
編集後記……40

表紙写真＝オンネトーから眺めた雌阿寒岳と阿寒富士。
撮影・岡田健志

発行日　2014 年 11 月 10 日
発行者　針 葉 樹 会
（会長　竹中彰）
印刷所　ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報
第 131 号

編集人　小島　和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1
会報幹事／小島和人、井草長雄
川名真理

一橋山岳会ホームページ　http://huhac.com/

羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳
～北海道山行シリーズ～

岡田　健志（昭42年卒）

期　間＝２０１４年７月３日～７日
参加者＝佐薙、本間、小島、小野、佐藤（久）、岡田、宮武、高橋結子

会員による北海道山行は長い歴史と実績のある行事となっている。北海道在住の会員、そのご友人にはそのたびに一方ならぬお世話になっていて、いつも安全で快適な山行を行うことができている。会報の場をお借りして、お礼を申し上げたい。

7月3日（木）　快晴

女満別空港発（13:50）― 小清水原生花園（14:40～15:10）― 海別（ウナベツ）自然休養村管理センター（16:30）

札幌在住の小野さんと、蛭川会員の姪ごさんで今回特別参加の高橋結子さん、お二人と女満別空港でドッキング。ここからレンタカーで海別自然休養村管理センターへ。途中、小清水原生花園へ立ち寄る。あまりにも静かなオホーツク海に拍子抜けしたものの、ハマナス、エゾカンゾウ、エゾスカシユリなどが咲き乱れる原生花園に見惚れてしまった。

海別岳山麓にある海別自然休養村管理センターからは波静かなオホーツク海が望め、夕食は１２００円で食べきれないほどのご馳走が出て一同大満足だった。

7月4日（金）　曇りのち快晴　羅臼岳

海別自然休養村管理センター発（4:15）― 岩尾別温泉、ホテル「地の涯」、木下小屋（5:06～5:37）― 弥三吉水（7:23）― 極楽平上（7:51）― 大沢の雪渓に下りる（8:51）― 羅臼平（9:39～9:55）― 石清水（10:20）― 羅臼岳頂上（11:08～11:40）― 石清水（12:25）― 銀冷水（13:40～13:49）― 極楽平下（14:23）― 木下小屋（15:55）― 清里温泉緑清荘（17:30）

今日は知床半島一高い羅臼岳を往復する長丁場。宿の朝食準備が間に合わないので、朝食を持って出発する。今回の山旅では「最年少」の宮武さんが最初から最後までドライバーを引き受けた。

海別から岩尾別までは、オホーツク海を左手に見ながら、知床半島を北上する。途中、オシンコシンの滝や、オホーツク海へ切り立った崖間際の道などスリルを味わった。また、道端から車中の私たちを見上げている、エゾシカやキタキツネとも対面した。

今回の山旅は、札幌在住の小野さん（１９６５年卒）に大変お世話になったが、その小野さんから40数年前に故大塚先輩と一緒に泊まったというホテル「地の涯」の話を興味深く聴いた。このホテル、こんなところによくまあ建てたな、というような立派なホテルだった。

木下小屋からはいよいよ山道になる。平日だが、登山者はそこそこ多い。さすがに世界自然遺産登録の地域だけのことはある。樹林帯の中の苦しい登りを行く。途中、弥三吉水（やさきち）・銀冷水といった水場があるが、キタキツネやヒグマのオシッコが混ざっていることを想像すると風土病が心配で飲む気にならない。

オホーツクをゆく漁船が白い波を引いて行くのは見えるが、山はガスがかかり視界は良くない。そんな天候下、大沢の雪渓の登りにかかった。先頭を行く小野さんの熊避け鈴がチリンチリンと鳴り響く。

雪渓が切れるあたりで、たくさんの高山植物が現れた。雪が無くなったので、足の置場が難しいが、後続のパーティーをリードする

地元のガイドが下の方から、も少し右だ左だと大声で注意をしてくれる。

羅臼平までの登山道にヒグマの糞があった。あとで聞くと、登山者がヒグマの姿を見たとのこと。やはり北海道だ。

羅臼平で休息後頂上を目指して登り始めるころには、ガスが晴れて快晴となった。這松帯を登るとしばらくして大きな岩がゴロゴロした所に出る。チングルマ、エゾノツガザクラ、キバナシャクナゲ、イワウメ、イソツツジ等が見事なお花畑を作っている。

羅臼岳頂上

振り返ると知床半島の先端へ続く山々が見える。羅臼平にポツンと張ってあった黄色いテントも鮮やかだ。下りのことを考えると恐ろしくなるような、大岩を辿っていく急な道を登り、11時すぎに羅臼岳頂上に着いた。狭くて大岩がゴロゴロする頂上で昼食をとったり記念撮影をしたり忙しいことだった。東方は雲が厚く、国後島は見えなかった。ただ、雲の上から僅かに黒くのぞく爺爺（チャチャ）岳らしきピークが見えた。

頂上直下の岩場を慎重に下り、ここをすぎるとあとはただひたすらに下るのみだった。

今夜の宿は清里町にある清里温泉緑清荘。緑清荘は、明日登る斜里岳が良く見える立派なホテルだ。

斜里岳頂上

7月5日（土）　快晴　斜里岳

緑清荘発（4:50）―斜里岳5合目、清岳荘（5:15～5:51）―斜里岳登山口（6:12）―仙人洞（6:55）―下二股（7:14）―羽衣の滝（7:45）―万丈の滝（8:20～27）―見晴の滝（8:44）―上二股（9:26）―馬の背（10:24）

雌阿寒岳頂上

― 斜里岳神社（10:40）― 斜里岳頂上（10:59～11:30）― 上二股（12:20）― 熊見峠（13:19）― 下二股（14:16～30）― 清岳荘（15:32）― 野中温泉（18:15）

斜里岳は先人たちからオンネヌプリ（大きな山）と呼ばれ、神のごとく崇拝された。優美な裾野を長く伸ばし、麓の町に豊かな自然の恵みをもたらしている。

斜里岳の西、オホーツク海にほど近い清里町は、一直線に伸びる農道、広がる四角い畑、間を区切る一直線の防風林と、日本離れした農村風景である（全国農村景観１００選に選ばれた由）。

清里からの斜里岳登山ルートは、５合目の清岳荘を起点にし、下二股から新旧コースに分かれる。一の沢川を遡行するのが旧道、熊見峠を経由するのが新道である。２つのルートは上二股で合流する。

われわれは、旧道を登り始めた。道は一の沢川を何度も何度も渡渉する。水の中をジャブジャブと渡らなければならないほどの水量ではないので、石伝いにヒョイヒョイと跳びながら渡るわけである。これが70歳超（中には80歳超も）の身には少々ツラい。

また沢の遡行なので、滝を横目に木やフィックスロープを掴んで登らなくてはならないところや、滝の高巻きを強いられる箇所もある。このルート（旧道）を下山に使うのは如何なものか？　という話が出、衆議一決で下山路には新道を使うことが早々と決まった。

上二股をすぎると道は水がほとんどないガレ場を登る。沢のドン詰まりは馬の背の稜線だった。

斜里岳神社をすぎ、ガレ場を少し登ると斜里岳頂上だった。頂上付近の上空には、何羽ものアマツバメが飛び交っていた。（アマツバメについては、ホームページの8月18日三月会報告参照）こんなに高いところにエサになる虫がいるのか？　それともスポーツのつもりなのか？

新道を使っての下山ルートは、熊見峠までは、振り返ると斜里岳の頂上を見ることが出来た。熊見峠をすぎると、樹林帯の急坂が連続しており、これが下二股まで続いている。

ヘトヘトに疲れて清岳荘へ戻って来た。

仕事のある高橋さんは、みんなより早めに帰京するとのことで、清里の民宿まで送ってそこで別れた。清岳荘から今夜の宿、野中温泉までは車で3時間を要した。

7月6日（日）　快晴　雌阿寒岳

野中温泉（7:45）― 雌阿寒岳オンネトーコース登山口（8:02）― ５合目（9:30）― 7合目（10:20）― ９合目（11:05～14）― 雌阿寒岳頂上（11:30～12:00）― 登山口（14:05）― 野中温泉（入浴）― 釧路（17:00?）

野中温泉は民営の国民宿舎で、大きな露天風呂がある。犬２匹とその犬たちととても仲のいい猫がいた。そのうちの１頭のゴールデンレトリバーは、ガイド犬で、雌阿寒岳頂上まで案内させてもいい、という話だった。

オンネトーコースを登ったが、５合目とか６合目という号標識があり、羅臼岳や斜里岳にくらべると、緩やかなそして明るい樹林帯の中の登り道だった。

オンネトーとは「年老いた湖」を意味するという。雌阿寒岳と阿寒富士を湖面に写し、紅葉の頃や雪のあるときはどんなにか美しいことだろう。

６合目の標識をすぎるところから振り返ると空の青を湖面に写したオンネトーが見え、行く手には阿寒富士の礫でガラガラの斜面が見えた。水分などゼロとも見える瓦礫の斜面にコマクサ、イワブクロ、メアカンフスマなどが、咲き競っている。その花の間をコヒオドシ蝶が飛び回っている。（この蝶の名称は、昆虫少年だった佐薙さんが下山後教えて下さった）

大きな爆裂口がある。活火山だけあって、蒸気がごうごうと音をたてて噴き出している。噴き出した蒸気は、真っ青な空へ消えていく。

頂上からは、阿寒湖や雄阿寒岳がすぐ近くに、その向こうには知床の山々が薄く見えた。風が強く、寒いほどで、ヤッケを着て昼食を摂った。

下りは、ザラザラの礫に滑らないように、リズムをとって歩く。樹林帯ではゴゼンタチバナが何株も花をつけている。ゴゼンタチバナは6葉の株に花をつけ、5葉株は花がつかない、と教えてもらった。

野中温泉で汗を流し、釧路に下る。釧路でのお楽しみは「岸壁炉ばた」での反省会だった。「岸壁炉ばた」は、川沿いの細長い場所を使っていくつもの「炉」が置かれ、客はそばの屋台から好みのものをその「炉」に持ち込んで焼いて食べるというちょっと変わったシステムの店。今山行の目的を完全に果たし、満足感に浸った反省会となった。

7月7日（月）　晴れ

せっかく釧路まできたのだからということで、釧路湿原まで行く。広大な湿原を地面から見るのでは、その広大さが実感できない。ヘリコプターなどを使って、空中から見ることが出来たらと思った。

昼過ぎ釧路発のＪＲで、札幌に。ここでは今山行に参加できなかった蛭川さんも交え「花遊膳」で最後の反省会。立派な店で計画完遂を祝った。

この地に「別」（海別、岩尾別、女満別…）のつく地名が多いことにつき、一体「別」とはどんな意味があるのか？　という話になった。蛭川さんが宿題として持ち帰られ、その後調査結果をホームページに寄稿されている。また、早くも来夏の北海道シリーズの計画も議論されるなど、意気軒昂な方々であった。

盛夏の白山～花の山旅

中村　雅明（昭43年卒）

本山行は昨年8月初に念願の赤木沢遡行を終え、引き続き行った裏銀座縦走の最後の山小屋（烏帽子小屋）の前で満ち足りた気分で濡れものを乾かしながら寛いだ時に、「来年の夏山はどこに行きますか」と小島さんが中村に問いかけたことからスタートしました。中村は「家内と一緒に白山で高山植物を楽みます」と答え、小島さん、川名さんも同行を希望されました。

今春中村が具体化した計画は、時期は確実に梅雨が明ける7月末から8月初旬、金沢まで夜行バスで行き砂防新道を登って頂上で2泊し、たっぷり高山植物を楽しんだ後、南縦走路を石徹白に下山、民宿に2泊するプランでした。

5月の連休後に日程調整しましたが、小島さんは8月3日からのねぶた祭りの前に下山、川名さんは8月4日午後の仕事に合わせて下山する都合があり、それに合わせて白山登頂の後は、それぞれ別々に下山することにしました。また、石徹白に下山するつもりの中村が5月中旬に民宿に予約電話をしたところ、8月2日から1週間、学童の林間教室で村の民宿全てが貸切りの為に宿泊不能であると判明したことから石徹白下山をあきらめました。他の下山コースは沢山ありますが比較的に楽に下山することが出来る岐阜側の大白川に下山することにしました。

その日は、平瀬温泉で山の疲れを癒し、翌日白川郷に移動し、半日観光した後、合掌造りの民宿に泊まって翌日帰京する、登山の後も楽しみなプランとしました。幸い天気に恵

まれて予定通りコースを完歩し、お目当ての白山の高山植物も堪能できました。一つ誤算だったのは頂上での2泊目の南竜山荘が満員で泊まれず、山荘近くの南竜ケ馬場野営場に泊まることを余儀なくされたことです。荷物も増えましたが、そのお蔭で久し振りにテント泊も楽しみました。

なお計画を固めるに当たっては、２００９年８月末に奥様と一緒に白山に登られた竹中さんの山行記（「夏の終わりに加賀の白山に出掛けました。」『一橋山岳会ＨＰ：国内山行報告』所収）を参考にさせていただきました。また、高校卒業後、白山室堂で働いていた山崎孝寿さん（特別会員）には白山全般、特に石徹白の民宿を教えていただきました。

メンバー＝小島和人（昭和40年卒）、中村雅明＆玖美子、川名真理（昭和63年卒）

行程

7月31日　新宿（22:45）発夜行バス

8月1日　金沢（6:45）＝（バス）＝別当出合（8:55～9:35）―２ｐで中飯場（10:25～32）―別当覗上（11:40～45）―２ｐで甚之助避難小屋（12:35～13:10）―３ｐで黒ボコ岩（14:52～15:00）―白山室堂（15:40）

8月2日　白山室堂（4:05）―御前峰（4:45～5:15）―（お池巡り）―白山室堂（7:15）

※小島さんは御前峰から白山室堂に戻り、朝食後別山出合に下山

［朝食］白山室堂（8:32）―南竜山荘（9:45）＝南竜ケ馬場野営場［アルプス展望台往復、南竜庭園散策］　12:15～14:45

8月3日　南竜ケ馬場野営場（5:50）―柳谷（6:20～30）―アルプス展望台（6:50～55）―平瀬道分岐（7:40～45）―３ｐで大倉山避難小屋（9:40～50）―３ｐで白水湖（12:00）＝（宿の車）＝平瀬温泉　※川名さんは野営場で中村夫妻と別れて別山チブリ尾根を市ノ瀬に下り、夜行バスで翌朝帰京

行動概要

7月31日（木）　晴れ

黒部源流山行は富山駅まで夜行バスで出掛けていたので、今年も22:45発の夜行バスで金沢に向けて新宿を発ちました。バス会社は昨年川名さんが乗ったWILLER EXPRESSです。昨年小島さんと一緒に乗ったバスよりも乗り心地が良く、昨年より疲れを感じませんでした。

8月1日（金）　晴れ

夜行バスは6時20分に金沢駅西口に着きました。朝から夏の日差しが強く夏山登山日和です。別山出合行きのバスは東口から6時45分と出発間もないので急ぎ乗り場に向かいました。乗り場に着くと登山客が列をなしています。定刻に発車したバスはほぼ満員です。市ノ瀬で小憩した後、金沢から2時間10分で8:55終点の別当出合（１３００ｍ）に着きました（バス料金２２００円）。白山登山の金沢側の主な根拠地であるだけに大勢の登山者で溢れています。

朝食、荷物整理の後、9:35出発。登路は室堂への最短コースで、白山登山者の8割以上が利用する砂防新道です。いつもの様に川名さんが先頭、小島さん、家内、中村の順に歩き出しましたが、登りが極端に弱い家内がついていけるか心配です。最初からかなり急なブナの樹林帯の道を2ｐで10:25中飯場（１５５０ｍ）に着きました。綺麗なトイレ、石のベンチがある良い休憩所ですが、残念ながら豊富に出ている水は飲料不適でした。

次のピッチで家内の足指が攣ってしまって歩行困難になりました。川名さんから「芍薬甘草湯」をいただき飲みましたがしばらく歩けそうにありません。川名さん、小島さんには先に行っていただくことになり、室堂までは家内と二人で登ることになりました。大部休んだ後、何とか歩けるようになったので足

白山御前峰の石柱を囲んで

の様子を見ながらゆっくり登りました。

別当覗上で休憩した場所にナデシコに似た白い花のセンジュガンピの群落があり、その花のまわりを舞うアサキマダラ蝶に慰められました。中飯場から2時間かけて12:35甚之助避難小屋（1950m）に着きました。この小屋は2010年新築の広くて綺麗な小屋でトイレ、水があり、小屋の前のベンチは昼食を摂る人で賑わっていました。川名さん、小島さんの姿はなく、先へ進んだようです。

我々もここで昼食大休止し、家内も元気を回復しました。足の調子も戻りました。13:10出発。黒ボコ岩（2300m）まで350mの急な登りですが、次々に高山植物が現れ疲れを忘れます。キヌガサソウ、ハクサンフウロ、イブキトラノオ、オタカラコウ、ニッコウキスゲ、シナノキンバイ、ハクサンコザクラ、クロユリ、ヤマユリ、タカネナデシコ・・・書き切れません。

14:52黒ボコ岩着。小憩後、弥陀ヶ原の木道を歩いて、最後の登り五葉坂を登って15:40白山室堂（2450m）に着きました。小島さん、川名さんに遅れること1時間。川名さんは甚之助避難小屋で我々がストップするのでないかと心配したそうで、2人の無事到着を喜んでくれました。早速、宿泊手続きを済ませました。2食付宿泊代8100円でした。白山室堂は収容人員750名で、別棟の宿泊棟が3棟あります。その1棟の一室の2階が既に割り当て済で小島さん、川名さんのザックが置いてありました。その横に我々のザックも置き、今夜のねぐらが確保されました。

食堂前のテラスのベンチに戻ってしばし寛ぎました。室堂平で石川県自然解説員研究会の解説員による自然観察会が16時から開催されるので家内がそれに参加しました。間もなく戻って来ましたが、それから2時間近く激しい夕立がありました。幸い夕食前に雨が上がりました。夕食は入替制で18時から。まずまずの内容でした。

夕食後、家内の案内で自然観察会のコースを辿り室堂平の花を楽しみました。タカネナナカマド、ウラジロナナカマド、ハリブキ、ハクサンフウロ、ミヤマキンバイ、ミヤマキンポウゲ、シナノキンバイ、イワギキョウ、クロユリ、ハクサンコザクラ……色とりどりの花を順番に見て歩きました。家内は似た花の見分け方など観察会で教わったことを復習を兼ねて皆に説明してくれました。

8時間近い夜行バス、休む間もなく2時間強のバス、高度差1150mの登りで疲れた4人は20時30分の消灯時刻の前に眠りにつきました。

8月2日（土）　曇り時々晴れ

3:45起床。前日、御来光が拝めそうな日は、その1時間くらい前に、白山比咩神社祈祷殿の太鼓が鳴り響くと聞いていましたが聞こえませんでした。それでも同じ部屋の人達が出掛けた様子なので4:05に御前峰に向けて出発しました。まだ暗いので御前峰に続く道は懐中電灯の灯が点々と連なっています。皆かなりのスピードで登るので息がはずみます。途中小休止しましたがコースタイム通り40分で白山の最高峰、御前峰の頂上（2702m）に着きました。もう大勢の人が御来光を

待っています。日の出を待つ間、白山についての宮司のお話を皆で拝聴するのも霊峰ならではです。5時少し前に御来光を拝みました。東の空の雲がオレンジ色に焼け、雲間から太陽が出て荘厳な気持ちを覚えました。御前峰からは３６０度の視界が広がり、東には北アルプス、槍・穂高連峰、乗鞍岳、御嶽山などの山並み、南より西にかけては別山がどっしりと構えている奥に岐阜、福井の山々が連なります。北には剣ヶ峰は大汝峰、さらに妙法山、三方岩岳……へと連なる稜線が望めます。

大展望を楽しんだ後、御前峰の石柱を背に写真を撮った後、小島さんはここで皆と別れ白山室堂に戻りました。3日朝からねぶた祭りに出掛ける為に今日中に帰宅する必要があるからです。遠路はるばるの白山登山なのに早々の下山、誠にお気の毒でした。[この後の小島さんの行動は後述]

小島さんと別れた後、川名さん、中村夫妻3人で「お池めぐり」をしました。白山は山頂部に大きな火口跡を持った山で、そこには油ヶ池、紺屋ヶ池、翠ヶ池……などの池が散在し、雪渓が残る池畔にはイワカガミ、アオノツガザクラ、イワギキョウ、チングルマ、ミヤマキンバイ、ハクサンコザクラ……などの群落が咲き誇り、誠に楽しい花めぐりが出来ました。室堂の近くのクロユリ、ハクサンコザクラの群落も見事でした。

深田久弥の『日本百名山』の「白山」に〝仰いで美しいばかりでなく、登っても美しい山である。匐松と高山植物に覆われた頂上には幾つかの旧火口があって、そこには紺青の水が湛えられ、それに配する雪渓や岩の布置が、天然の庭園のような趣である〟と書かれていますが、まさにその通りでした。

室堂に7:15に戻り、山としては遅い朝食を摂った後、荷物を整理し8:32室堂を後にして、トンビ岩コース経由で南竜山荘に下りました。途中雨がパラつきザックカバーをしましたが雨具を着ることもなく幸いでした。1時間強で南竜山荘に着き、早速野営の受付をしました。借りたのはテントの下に敷く敷板2枚、毛布3枚です。宿泊代３００円／人、夕食3人分（南竜山荘）、朝食弁当2人分、〆て９２００円でした。昨年まで借りられた貸テントが今年は無く誤算でした。その為2～3人用テントを持参しました。それでも山荘で食事が出来たので食糧を運び上げる必要がなく助かりました。

野営場は南竜山荘から少し下り柳谷を渡って少し登った台地（２０８０ｍ）です。明るく乾いた気持ち良い野営場で１００張、収容人員５００人と広いものです。炊事場は広々とした水道付きステンレス流し台がある立派なものでしたがトイレ棟は古くて不潔でした。

早速テントを張りましたが、持参したフライが1～2人用で小さく使えません。今晩も雨が降る可能性大なので途方にくれましたが、倉庫の管理人に相談したところ大きなブルーシートを貸してくれました。それをフライシートに代用することにして、中村主導であれこれ工夫してペグ、ロープでテントに固定できました。大きなブルーシートなので入口前に前室まで出来ました。これで今晩雨が降っても安心です。中村の作業を見ていた川名さんが「私が将来、ホームレスになったら、中村さんみたいな人に指導を受けてテントを立てたい」と冗談を言ったので皆で大笑いしました。

テント設営後、お湯を沸かしてコーヒー、お茶を飲みながらゆっくり昼食。まだ夕方までたっぷり時間があるので、展望尾根のアルプス展望台まで2時間かけて往復しました。アルプス展望台までオオシラビソの中の急な登りでしたが、それを抜けると尾根の斜面は一面のお花畑でした。イブキトラノオ、タカネナデシコ、ハクサンフウロ、タカネマツムシソウ、カライトソウ……が咲き乱れていました。特にタカネマツムシソウは今回初見参だったので家内は大喜びでした。アルプス展

望台からは遠くに北アルプスの山並み、眼下に白水湖が見えます。

また、帰路、家内を喜ばすことがありました。オオシラビソの樹林帯にホシガラスが４～５羽飛来し、近くの枝に止まりました。鳥の写真を撮ろうとしてもすぐに飛び立ってしまいますが、今回はじっと止まっていたので良い写真が撮れました。野営場に戻る前に、野営場の近くの南竜庭園と呼ぶ湿地に寄りましたが、乾燥が進んだ為か見るべき花がありませんでした。南竜庭園から少し行った所で川名さんは明日の下山ルートを偵察しました。別山チブリ尾根へ下る御舎利山へは一度赤谷までかなり下って、急な油坂を登り返すのが見え、「川名さん、明日は大変ですね」と同情しました。

野営場に戻るとテントが大幅に増えてほぼ満杯でした。夏休みに入って第２土曜日の為でしょう。我々の隣にもテントが張られていましたが、その住人が我々のテントにブルーシートをかぶせてあったので荷物置き場と勘違いしましたと言われ、「我々は白山の避難民」ですと冗談で応じました。夕食は小屋泊りの人に交って山荘の食堂で済ませました。

夕食後はやることがないので早々と眠りにつきました。２～３人用のテントなので３人横になると身動きできません。それでも小柄な女性２人なので何とかしのげました。完璧な雨対策をしましたが夜中雨は降りませんでした。ただ残念だったのは夜中にトイレに行きましたが曇天の為全く星は見えなかったことです。晴れていれば〝満天の星空〟を楽しめたでしょう。

８月３日（日）　曇り時々小雨後晴れ

4:00 起床。まだ暗いです。外に出てテントの前でニューメン、ウドン、そばのごった煮を作り、簡単な朝食を済ませました。テントを撤収し 5:50 出発しました。今日は川名さんと我々夫婦はここで別れ、別ルートで下山します。川名さんは御舎利山から別山チブリ尾根を市ノ瀬に下ります。テントをバックにした写真を撮った後、お互いの無事を祈って 5:50 に野営地を後にしました。［この後の川名さんの行動は後述］

久し振りのテント泊は小屋泊りと違った面白さがある、再開しようかと思いながら歩き始めました。我々は昨日登った展望尾根を平瀬道分岐に登り、大倉尾根（平瀬道）を白水湖まで下ります。初日に足が攣った家内が無事下山出来るか心配でした。ところが家内は意外に元気でアルプス展望台までの急登もコースタイムの１時間で登りました。展望台下のお花畑を楽しんだことは言うまでもありません。平瀬道分岐に 7:40 着。後は大倉尾根の下りなのでホッとしました。分岐付近にはクロユリ、ハクサンフウロが所々固まって咲いていたのが可憐でした。

大倉尾根を下り始めると、正面遠くに北アルプスの槍・穂高連峰が望まれます。しばらく下ると、「迂回ルート」の道標近くの尾根にタカネマツムシソウの群落を見つけました。アルプス展望台下のお花畑より見事でした。「これほどのマツムシソウを見たのは初めて」と写真を撮りまくりました。シモツケソウも綺麗に咲いていました。

さらに尾根を下って行くとずっと探しながら歩いていたグンナイフウロを見つけ歓声を上げました。マルバダケブキ、シナノキンバイの黄色も目を楽しませます。かなり急な下り道も花を見ながらなので苦になりません。家内も調子良く下りました。この尾根は岐阜県側からの一般コースで、日曜日でもあるので続々と登山者が登ってきます。9:40 大倉山避難小屋着。コースタイムよりゆっくりですが時間はたっぷりあるので気になりません。立派なログハウスですが、水場、トイレが無いので泊まるのは不便でしょう。ここからは白水湖を見ながらブナ樹林帯の中を３ｐひたすら下り、12:00 に白水湖に下山。３日間の白山登山を終了しました。

駐車場には沢山の車が停まっていました。途中で会った登山者は皆ここに車を置いて白山を往復するのでしょう。今晩の宿は大白川を車で約30分下った平瀬温泉「くろゆり荘」です。昨年まで夏期定期運行していたマイクロバスが今年から廃止されたので、宿に迎えをお願いしてありましたが、16時の約束でした。時間が十分すぎる程あるので、湖畔にある露天風呂にゆっくり浸かりました。近くの白水湖水ロッジで料金を払って温泉小屋に入ると脱衣場があるだけの素朴な温泉ですが、湖を見ながら山の疲れをほぐすのは格別です。温泉の後はやることもないので白水湖水ロッジ近くの道端の東屋風のテントを借りて（無料）時間つぶしをしました。3時頃、宿のご主人の車が到着し予定より早く宿に入ることが出来ました。親切なご主人が途中で日本三名瀑の一つ「白水滝」の展望台に立ち寄ってくれるおまけもつきました。

白山のお池めぐり

今回、長年遠くから眺める山であった富士山、立山と共に日本三霊山のひとつ白山に登ることが出来ました。白山の核心部を歩き、白山の良さを実感しました。天気に恵まれ、お目当ての高山植物も堪能しました。今年逃した石徹白道（南縦走路）、北には加賀禅定道、岩間道、中宮道など避難小屋1泊を覚悟すれば温泉に下山できるルートが沢山あります。川名さんとは山中で「来年は岩間温泉元湯、岩間の噴泉塔群を目指して岩間道を下りましょうか」と話が弾みました。白山シリーズとして何回か通っても良いでしょう。

●下山後のメールから

白山お世話様でした。小島和人（２０１４年８月７日中村、川名さんへの返信から抜粋）

中村さん、川名さん（前略）　２日の日は５時20分に皆さんと別れ20分で室堂に帰りましたが、朝食の長い列で、先に帰る支度をして食堂へ。朝食を済ませて６時半に下りはじめ、途中のお花畑を写真に撮りながら中村さん川名さんの言っていた花の名前を一生懸命思い出しながら下りました。この日はバス停に降りてから聞いたのですが８００人の入山者があったそうで砂防新道も入山者の列が続き、４００回ぐらいは「おはようございます」と言ったと思います。それでも甚之助小屋に７時半、中半場に８時半、別当出合に９時半に着き11時半のバスまで余裕が出来ました。川名さんのご推薦を想いだしシャトルで市ノ瀬に出て、バス停前の永井旅館に上がりゆっくり温泉を楽しみ、ビールでくつろぎました。11時45分の予定のバスで金沢に出て越後湯沢経由で帰りました。弾丸登山となりましたが天候と仲間に恵まれ楽しい山行でした。来年も機会があればまた来てもいいかと白山のお花畑を思い出していました。中村さん川名さん有難うございました。

白山お世話様でした。川名真理（２０１４年８月６日小島さん、中村への返信から抜粋）

中村さま　小島さま　白山では大変、お世話になりました。暑い中登り切ることができて、よかったです。余裕のある行程だったため、お花畑を存分に楽しみました。

（中村の川名さん宛てメールより抜粋）

川名さん　お互い久し振りのテント泊、荷物は重くなりましたが、面白かったですね。フライでなく内張りと思われるものを持って行ってしまいフライ替わりのブルーシートを張ったテント、異彩を放ちました。前室まで出来たおまけもついたのは愉快でした。私に思いがけずホームレス生活の才能があることが判ったのは収穫です。

（略）

御舎利山への登り如何でしたか。展望尾根を登りながら川名さんを探しましたが見つかりませんでした。前日一緒に見た以上に大変だったのかも知れませんね。こちらは家内の調子が良く大倉尾根（平瀬道）を順調に下りました。お目当てのグンナイフウロを尾根の下り道で家内が見つけました。家内は自信を持ってそうだと言っています。

（川名さんからの返信）

テント泊、おかげさまで快適でした。ありがとうございます！　手前のピークまで、ほぼ1ピッチで上ったため、おそらく見えなかったのだと思います。その後、中村さんたちがいる方向が見えるときは何度も振り返りながら目をこらしましたが、人影を認めることはできませんでした。

稜線の左側はアルプス展望台と同じぐらいすばらしいお花畑で、2ピッチ目は写真を撮りながら、かなりゆっくり歩きました。途中で横向きに何度もガスが通り過ぎましたが、雨具をつけなくてもしのげる程度でした。

市ノ瀬の永井旅館に着いたのが13時過ぎ。13時45分のバスだとゆっくりお風呂に入れないのでやりすごして15時45分のバスで金沢に向かいました。ほとんどマイカーの人ばかりで、その人達は白峰にある温泉へ行くらしく、永井旅館の風呂は気の毒なくらいガラガラでした。でも、利用する側としては、ほぼ独占状態でよかったです。市ノ瀬には食事処はなく、永井旅館の休憩室はとても小さかったのですが、カップめんを買って福井からきたという女性とおしゃべりするうちにあっという間に時間がたちました。白峰には国指定重文の仏様（もとは山頂に鎮座していたもの）が拝観できるそうで蕎麦も有名らしく、機会があったら白峰もまわってみたいなと思いました。（後略）

白山の花～チブリ尾根下山

川名　真理（昭63年卒）

白山は、たしかに花の名山でした。時期もよかったのかもしれませんが、咲いたばかりで完璧な形状を保った花が、惜しみなく、たくさん咲いていることに感動しました。黒百合を見るのは初めてで、最初の一輪を発見したときはまた会えるだろうかと別れを惜しむような気持ちでしたが、大群落がここにもあちらにも続々と広がっていることがわかり、びっくりしました。

山頂付近では、池と稜線が庭園のような景観をつくるなか、光と影が流れ、花々も刻一刻と表情を変えていました。中村ご夫妻が花に詳しく、勉強になりました。

最終日、別山へ続く稜線では、ちょっとしたピークを越えるごとに彩りの異なるお花畑が現れ、シャッターを切るのに忙しく、通過に時間がかかりました。別山はガスっていたのでパス。すれ違った男性に「チブリ尾根の上部は風が強いよ」とやや脅されましたが、

難なく通り過ぎました。
尾根は中盤から登（下）山口まで立派なブナ林が続き、ここも見どころの一つだと感じました。ほぼ前後に誰もいない状態で独りだったこともあり、森にみなぎる「気」を全身に受けて、虫や鳥の気配も感じながら、しっとりと歩きました。1年前、足の中指と薬指を遊ばせた歩き方をしていることに気づき、日ごろから気にかけて矯正したのが下りで役に立ったように思います。
途中、私を追い抜いていった二人連れの男性の一人が道を踏み外して腰まで落ち、もう一人が助けようとしてバランスを崩してやはり落ちてしまったのには焦りました。大事はなかったのですが、見てはいけないようなものを見てしまったようで……。
白峰温泉（市ノ瀬）の永井旅館で入浴。小さなお風呂ですが泉質は申し分なく、入浴後はビール片手にカップうどんをすすりながら、福井から来た元気のよい同世代の女性と話がはずみました。帰ったら地元のスポーツジムに行って、ストレッチして、入浴して、ビールを飲むそうです。登山後にジムに行くとは、すごいです。
市ノ瀬から少し下ったところにある白峰は「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された昔なつかしいたたずまいの集落で、国の重要文化財に指定されている仏様を拝観できるお寺（林西寺）もあるそうなので、次はそこにも寄りたいと思いました。

沢・渓・川 ＝山登り50年の断想＝

藤原　朋信（昭44年卒）

私が生まれたのは昭和22年の2月2日で、戦後生まれといっても戦争の爪痕は周りに色濃く残っていた時代である。食料も乏しく遊び道具も何もなかったが、「国破れて山河あり」で、また育ったのが山口県の山奥だからまさに裏山をかけまわり、川で遊ぶ毎日だった。
当時日本でも有数の銅山があった故郷の川は、製錬後の排水を流す下流は、川石も赤茶け水も灰色で公害そのものであったが、上流は一転して青く澄んだ水が淵や淀みをつくりかっこうの遊び場であった。後年苦しい時に思い出す情景は決まって里山に囲まれ集落とわさび田が点在する中を流れ行く川面のきらめきであった。
山登りを始めたのは19歳のときだが、一橋山岳部で雪と氷と岩のアルピニズムに触れ、山といえばアルプスしかないという時代が長く続いた。ピークハンターとして尾根を縦走するか、バリエーションルートから山頂に到達して一端のアルピニスト気分であった。当然、標高が２０００ｍに満たない山々は山登りの対象外であった。
転機は4年前に糖尿病対策で年間１００日の山歩きを始めたときであった。１００日達成の為に日帰りで関東近郊の低山に出かけて、妙に心の安らぎを覚えた。
峠、沢、森林、山村の集落をただひたすら歩くだけのものだが、その山旅が私の原点回帰であったのだろう、スイスアルプスやヒマラヤに出かける計画は棚上げし、低山歩きは関東近郊から日本全国に広がりをみせている。

１．２０１４年夏　67歳　沢登り

低山歩きは、秋から冬・春は良いが夏は暑いし虫も多いので、夏の定番は沢登りになる。沢登りの魅力は人によって感ずるところは違うと思うが

①山頂への効率的な到達ルートとして渓谷美を楽しみながら登る。
②滝の登攀を中心に岩登りのゲレンデとして遡る。
③釜・淵の天然プールで水と戯れ童心に返る。
④沢の巻道、詰めの藪漕ぎ等、昔風なワイルドな山を味わう。
以上のどれか、あるいはそれのミックスしたものになる。

若い頃、山への登山道は沢筋が多かった記憶があるが近年の台風・豪雨で道は尾根筋に付け替えられており、いまや渓谷美を楽しむには、意図的に沢に入って行く必要がある。夏になると、周りの人に沢登りの楽しさを宣伝し同行者を募るのだが、いざ終わってみると、ひと夏に1、2回しか遡行していないことが多かった。今年は学生の人数も増えて、行く機会もあるだろうと、これまでのわらじに替えて渓流シューズ1万5千円を購入し登る態勢を整えた。しかし今夏は異常に天候不順で計画の変更を余儀なくされるケースが多かった。でも幸い中村さんや学生の同行もあり6～9月で5回の沢を遡行した。

6月：軍刀利沢　学生の長島・高橋・太田・上君と

丹沢水無川本谷で沢登り

7月：石津窪　中村さんと五日市駅から臼杵山・戸倉城山経由
8月：①水根沢谷　単独　②丹沢水無川本谷　中村さん、学生の太田君と
9月：川乗谷逆川　学生の太田君と

沢登りは、自分のペースで登れないので、一般登山道を歩く山行と比べて格段にエネルギーを消費する。水無川遡行の時は、8月20日の猛暑日のせいもあり、塔ノ岳から大倉へ下りた最初の自動販売機でペットボトル1本を飲み、更に帰宅時まで追加2本という消耗度であった。山登りは佐薙大老を目標に歩ける限りは頑張りたいが、クライミングと沢登りは、75歳が限界かと考えている。

2．1985年夏　38歳　サウジアラビア

山登り50年の中で、海外勤務の為に2年間山から離れた期間があった。8月にサウジへの辞令を交付され、気持ちの踏ん切りがつかない時期にあの日航機事故が起こった、会社の同僚が4人犠牲になり、その中の一人は仕事の関係も深く、運命の皮肉にただ呆然とするばかりだった。彼はメキシコのJ（ジョイント）／V（ベンチャー）から帰国したばかりで事故にあった。メキシコ現地ではいつ落ちても不思議は無いプロペラ機で建設現場と現地事務所を4年間往復した。任務を終えて日本に帰り、これで飛行機事故の恐れは無くなったと笑っていたのにである。

人の運命は分からないと思い知らされ、海外行きの覚悟もできたが、赴任前に山を一つ登っておこうと選んだのが、山頂ではなく笛吹川東沢遡行だった。日本を離れる最後の山行という感傷もあって、東沢の渓谷の美しさが心にしみた。とりわけ最初にでてくる東のナメはこれぞ日本にしかないナメだと思った

（昨年6月に中村さんと東沢を下った時には、東のナメは台風でやられて往年の美景は消えていた）。

「百聞は一見にしかず」であった。サウジアラビアの土漠（砂漠というイメージではない）生活は日本の自然の素晴らしさ、豊かさを教えてくれた。水が持つ恵みを享受できる日本に生まれ住んでいる幸福は何物にも代えがたい。

2年後に帰国してから、少し山登りが変わった気がした。山頂のみならず、川や森林にも目がいくようになった。時には遠く離れてみるのが良いというのはどうも真実らしい。

3．1967年夏　20歳　俵兄と沢登り

私の学生時代は、全共闘時代と重なる。いわば政治の季節であって、露語の授業をつぶしてクラス討論なるものを頻繁にやった。「いま我々はなにをなすべきか」と議論をするわけであるが、田舎から初めて東京という大都会に出た私にはとてもついていけない。

クラス討論で幼稚な発言をする私を見かねてか、俵兄が私の下宿に来るようになった。出張授業である。同じクラスでも俵兄は実社会経験者で4歳年長、ヘーゲルだマルクスだと言われても太刀打ちできるわけがない。1年経って2年生になった時、今度は山岳部に入れとのお誘いである。この頃には完全にマインドコントロールされていたので、気がついてみたら山岳部員であった。

俵兄とは3年生の時に6畳をシェアして同居した。山岳部活動に俵兄が集中していた頃で傾倒する小谷部さんの鹿島槍荒沢奥壁の記録を研究していた彼の姿を良く覚えている。

この頃のある時、俵兄が私のサブザックを持ってどこか日帰り山行に出かけた。当時は合宿に参加するだけで手一杯で、個人山行は皆無に近かったから何か期するものがあっての山行だったのだろう。その日帰ってきた俵兄はザックを私に渡すと、何も言わずに背中をむけた。ザックをみるとかぎ裂き状態でぼろぼろになっている。どうしたんだと聞こうと思って横顔をみるとショック状態で話をする雰囲気ではない。

これは沢で墜ちたなと合点した。当時丹沢の沢で墜落する若者が後をたたず、谷川で墜ちるか丹沢で墜ちるかであった。名クライマーの小谷部さんに少しでも近づくはずの、岩登りで落ちたショックが大きかったのか、その後俵兄が岩登りに行った話を私は知らない。

とは言え、沢で墜ちたというのはあくまで私の推測で、俵兄には事実を聞きそびれたままである。なぜか聞いてはいけない話のように思えて（多分本人は忘れているかもしれないが）今日まで本人に何があったかを確認していない。

彼の事故（？）は私にも相当影響があったのだろう、沢登りは怖いとの思いが強く、学生時代に沢登りに行くことはなかった。社会人になってから初めて丹沢に出かけて、全身を使って登る楽しさを知った。冠松次郎の名著『渓（たに）』を読んだのもその頃で、日本全国の沢・渓の美しさに目を開かせてもらった。以来、沢・渓・川は私の山登りには欠かせない。

上越後の山、海、風土

加藤　博行（昭51年卒）

新潟県三条市で仕事をするようになって、もう十年以上になる。三条市は長岡市の少し北に位置する金物や刃物の生産で有名な街で、洋食器が名産の燕市と上越新幹線の燕三

条駅をはさんで並んでいる。故郷を住んだ長さで量るなら、高校までを過ごした同じ県内の上越市に次いで、第二の故郷のようなものである。

会社のすぐ近くに住んでいるので、東京で働いていた時の通勤時間が不要で、一日二時間位、一年で計算すると約一ヶ月分丸まる時間の余裕ができ、人生を得した気分になっている。

その時間を生かして、日頃は毎朝、市内を流れる五十嵐川（信濃川の支流）を三〇分程散歩している。週末は、その川の下流に聳える弥彦山（六三四メートル）や、上流の粟ヶ岳（一二九三メートル）を季節の折々に登って体力維持に努めている。

余り記録になるような山登りもしていないので、会報に書くのも少し憚られるが、そうした生活を送る中で、考えたことを少し書き留めてみることで、山行記録に代えさせていただきたい。

一．山と北陸新幹線

先ごろ北陸新幹線が来春三月開業し、金沢まで最速約二時間半で到達することが報じられた。この開通で私の故郷である上越市にも、漸く新幹線が来る。

停車駅は、当初上越駅（仮称）とされてきたが、最終的に「上越妙高」に決まるまで長く論争が続いた。何といっても最大の悩みは、「上越」という地名が紛らわしいことだった。関東方面の人にとって、「上越」とは在来線の上越線であり、「上越国境」で有名な上野国（上州）と越後の「くにざかい」の方角をイメージする。

その意味で上越新幹線はぴたりとはまる。上毛高原駅を出た後、国境の大清水トンネルを抜けると、列車は冬真っ白な雪の中に突然放り込まれて、まさに冬の越後に来た気がする。

一方、こちらの上越の由来は全く異なる。古来越後は大国であったので、国を三分して旧高田市・直江津市地域を中心とする上越（かみえちご）後、長岡を中心とする中越（なかえちご）後、新潟を中心とする下越（しもえちご）後と呼び習わしたことによる。

上越国境に対して、こちらは上越地方であり、歴史的には遙か奈良時代の国府・国分寺が置かれた頃から栄えてきた地域であり、旧高田市と直江津市が一九七一年に合併して上越市が誕生した。

江戸時代には「北国街道」と呼ばれる、佐渡からの金塊を出雲崎に陸揚げ後、江戸に運ぶ重要な街道が高田を経て、関山（せきやま）の関所を越え、信濃の善光寺に通じていた。また加賀百万石の前田家は、参勤交代で加賀街道から高田を経由して江戸へ向かうため、この地はかつて交通と外様大名へ睨みをきかす要衝であった。徳川家康の六男である松平忠輝が七十五万石を得て城を開いて今年は四百年目にあたる。

結局、新幹線の駅名は最後には、信越国境に近い「妙高山」の知名度に助けを借りた。これで赤倉、池の平といった古くからの温泉場、スキー場ともイメージがつながることに地元は期待した。

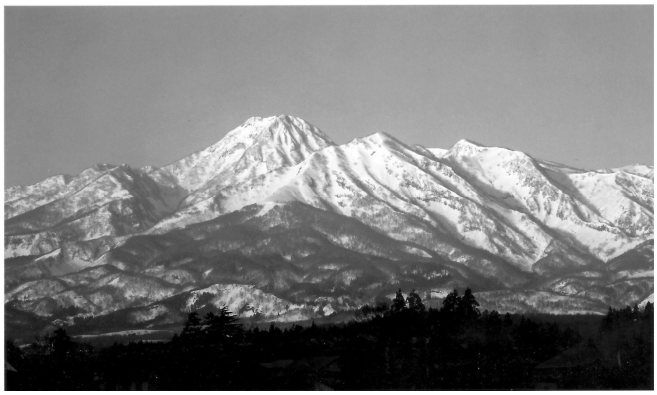
もう一つ、今回の北陸新幹線の停車駅と列車編成の発表での衝撃は、地元新聞紙上の見出しを飾った。全国紙が、「鉄道ＶＳ航空　北陸の陣」という見出しに対し、新潟の地元紙は「かがやきを失う」という悲しい響き。

つまり最速型の新幹線「かがやき号」は、東京、長野駅に停車後、上越妙高を素通りして、富山、金沢へ行ってしまうことに愕然としたのである。当初一時間四十八分で東京から上越妙高駅に到着するはずの高速列車がすべて素通りとなった。

山で喩えれば、東京からのお客様を妙高山や火打山は素通りして、立山、剣岳、白山へご案内というもの。確かに妙高登山へのアクセスは今とあまり変わらないと思われる一方、立山、剣、白山は格段に良くなり、登山や観光のフットワークが増す。

地方が急速な人口減少で二〇四〇年頃には、半数近くの地方都市の消滅が予測される中、新幹線の停車が、その周辺の地域に、光と影の影響を与えることがこれまでも指摘されている。

春三月、長野を出た北陸新幹線の車両は、飯山駅を過ぎ上越妙高駅に近づく手前で、左側の車窓から、遙か遠くに霞むようにして妙高山を望む。在来線である信越線の関山駅から



春三月、関山駅付近からの妙高山　金子晴彦撮影

ら多くの雪を頂いて目の前に圧倒的な迫力で迫ってくる景色は失われた。

そしてあっという間に日本海に伸びる山稜のトンネルに吸い込まれ、富山に一気に向かうことになる。地元市民が落胆する姿には、根深い郷土ナショナリズムが感じられるが、私も同感するところがある。

二、霊峰妙高山

言うまでも無く妙高山（二四五四メートル）は、新潟県のみならず日本を代表する名峰の一つであると私も思う。

越後高田の街から見ると、朝日は東に位置する米山（八六四メートル）から昇り、夕日は妙高山の肩に沈む。米山は、薬師如来のいる現世利益（りやく）の山であり、妙高山は阿弥陀如来のいる来世利益の山として、古くから厚い信仰の山として崇められ、戦国時代の武将上杉謙信も朝な夕なに礼拝を重ねたといわれている。

二重式火山で中央に中山が聳え、外輪山は、神奈山、前山、赤倉山、三田原山、笹ヶ峰、黒沢岳、茶臼山、大倉山と八峰あり、はすの実を取巻く花弁（八枚）に喩えられる。はすの花は仏のまします座であり、高田城下の西に配置された約七十の寺院が並ぶ寺町の境内の向うの山並みに日が沈む。霊峰に相応しい姿で古くから庶民の精神的安息の場として崇められたことは、想像に難くない。

妙高山初登頂は、麓にある関山神社に残る古文書によれば、奈良朝和銅元年（七〇八）裸行上人が妙高山頂を極めたとあり、これが記録にある妙高登山第一号らしい。（直江津雪稜会編『笹ヶ峰・火打山研究』所収「火打山頂の懸仏と妙高山関山大権現」より）

一一八一年夏、伝説によれば木曽義仲が平家を追跡して関山に入り、妙高山を昇って戦勝祈願をした。上杉謙信も毎年六月の山開きには、妙高山竜旗（上杉家の戦闘旗）を関山神社に下賜しており、信仰と練兵をかねて謙信自身もたびたび妙高登山に加わったとされる。

明治以降では、外国人として、幕末から明治の日本に長く関わりを持った英国外交官、アーネスト・サトウが一八八〇年に新潟開港に立ち会う途上に初登頂したことは、彼の自著『日本旅行記』に記述されている。

また登った記録こそないが、妙高山麓の陸軍演習場には、一九一〇年に当時高田の陸軍に入隊していた蒋介石も足を運んでいる。（『妙高火山の文化史』小島正巳著）彼は翌年起きた辛亥革命で中国へ帰国したことは、旧高田連隊のそばにあった高田高校で、世界史の時間によく聞かされた。

我が一橋山岳部では、戦前の一九三〇年（昭和五年）十一月、吹原不二雄先輩が、針葉樹第六号に「北信三日の山旅」の記録を載せている。単独行で大糸線小谷温泉から、乙見峠を越えて笹ヶ峰に入り、火打山の登山路開拓で有名な岡田長助の案内で、高谷池手前から、妙高山に登り、燕温泉経由関山に下山した記録が初登頂のようである。

五年前の二〇〇九年三月、我々の仲間である近藤泰君が妙高山のピーク近くからのスキー滑降で亡くなったのは、本当に残念なことであった。

三．日本海

一二〇七年四月、親鸞は京都から追放され越後国府に流された時、直江津の居多ヶ浜（こたがはま）に船で上陸した。直江津より少し西には、親不知・子不知の地名があり、海岸線は断崖絶壁と荒波で、旅人はそこを通過するとき、親子でも相手を思いやる余裕がないことからそう呼ばれた。

直江津より少し北になるが、一二七一年十月には、日蓮が寺泊から佐渡に流され、五年後に佐渡から柏崎の番神岬に着岸した。また時代がもう少し前の平安末期の頃、直江津は、森鴎外が説話をもとにして書いた小説『山椒大夫』で安寿と厨子王が人攫いに遭い、母親と離ればなれになった場所でもある。

この話は、子供の頃からいやになるほど聞かされ、私も小さい頃一時期直江津にいて、両親から「海へは絶対行ってはいけない。人攫いにあうから」と言われて育った。

山が霊性で満ちているのに対し、海はどちらかといえばどれも暗いイメージが付きまとう。その後の北朝鮮の拉致事件をみれば、人攫いは実際あったわけである。

新潟県の海岸線は約三百三十一キロメートルで、直線部分では、日本海側では最長であるが、にも拘らず拉致事件が発覚するまでは海上保安庁の巡視艇は一隻程度であったらしい。北朝鮮の港を出て、暗くなってから上陸すれば誰にもわからない、恐ろしい治安状態が長く続いていたことになる。

少しのどかな話題としては、この海岸線は、江戸時代には、一六八九年に松尾芭蕉が『おくのほそ道』（越後路の項）で、出羽国（山形）から二週間余りで越後を歩き切り、越中富山へ抜けた場所でもある。歩いた実質日数は九日程度であるから、一日四十キロメートル近い健脚である。

この間に最も印象的であった風景に出雲崎あたりで出会い、それを直江津の句会で詠んだ「荒海や佐渡に横たふ天の川」は、あまりに有名だ。事実出雲崎あたりが、天気が良い日に海岸線から佐渡が一番近くに見える。

出雲崎といえば、もう一人江戸時代後期に良寛という曹洞宗の坊さんを輩出している。子供の頃に学校で、良寛は床下に生えてきたタケノコを生かすために、床板を外し、そして屋根に穴を開けてまで助けたという童話のような話を教わった。

乞食の成りをして、出雲崎から私が今いる三条近辺に托鉢しながら、子供たちとひねもす遊びほうけて、優れた漢詩や和歌を残した。新潟県で最も好かれ今もなじみの僧侶はおそらく親鸞や日蓮ではなく、良寛であり、各地に彼の石碑が残っている。

四．上越後の山と海に囲まれた風土

目の前が海で振り向けば山という、海と山の接点が本当に近い地域で、私は高校時代までを過ごした。

妙高山は峨々として
千古の白雪天を突き、
日本海は汪々と
万里の波濤空をうつ
山水霊なる越の国
学びの友垣一千余

これは、高田高校の校歌で、戦前の作詞だ

が、越（こし）の国は、「山水霊（れい）なる」と言っている。梅原猛はその著書『日本の霊性』の中で、越後のこの地域の風土が古くから人々の霊性を育み、歴史的に著名な宗教家を通して熟成し、開花したのではないかと言っている。

三方を山並みに囲まれ、北に海を臨むかみえちご（上越後）は、長く越の国の代表的地域で栄えたが、その後、中越後の長岡、下越後の新潟に繁栄は移っていった。城下町は明治に入り軍都に姿を変え、そして戦後は県内でも繁栄の波に乗り遅れた地域とされた。

江戸時代中頃までに往時のかがやきは失われていたのである。そしてこの先はどうなるであろうか判らない。

新しい時代の交通網がどんな風に地域を変えていくのか、また新たな歴史が始まろうとしているが、いつまでも故郷を見守っていきたい。

山岳地図集『ヒマラヤの東―チベットのアルプスとその彼方』について

（中村　保さんのメールより）

日本山岳会創立１１０周年（２０１５年）記念出版事業としてヒマラヤの東山峰地図集（英語・日本語）と英文ジャーナル*特集号が出版されます。日本山岳会の担当は「山と渓谷」元編集長の神長幹雄さんです。

ヒマラヤの東地図集は、今年傘寿を迎える中村の四半世紀に亙る踏査研究の総仕上げで、最後のライフワークでしょう。竹内康之さんに図版仕上げ、レイアウト、版組、装丁をご担当頂き、永井剛さんには校正などでご協力頂いています。言わば横断研の数年がかりのプロジェクトで、日本山岳会・横断研の共著として明年７月に出版予定です。

日本語序文は斎藤惇生さん（元日本山岳会会長、横断研会員）にお願いし、英語の序文はミック・ファウラーさん（前英国アルパインクラブ会長）です。

＊英文ジャーナル Japanese Alpine News は中村が14年間シングルハンドで手がけてきたもので（一部池田常道さんのご協力を頂いた）、２０１５年号を創立１１０周年の記念号とします。

（地図集の前文より）

「不思議なことである。中国の領内には広大な山系が存在するが、それらは西側の世界だけでなく、中国の人たちにも全く知られていない。」

――ジョセフ・ロック（ナショナル・ジオグラフィック１９３０年10月）

『中国登山指南 *A Guide to Mountaineering in China*』（中国登山協会・成都地図出版社共編１９９３）の冒頭の「中国高峰分布図」をご覧頂くと「チベットのアルプス」の核心部、最も未踏域の多い念青唐古拉（ネンチンタングラ）山東部と崗日嘎（カンリガル）布（ポ）山群がすっぽり抜けて、白紙になっていることに気付くであろう。中国の登山界にとってもこの二つの広大な山系は地理上の空白部として扱われてきた。

「チベットのアルプス」念青唐古拉山東部から横断山脈の東縁まで、この神秘的な辺境には無数の未踏峰が存在する。信じがたいほどの複雑な地形がこの山域を特徴づけている。その一部はこれからも長く不可解な土地として残るであろう。知られざる未踏峰と氷河が最も集中している念青唐古拉山東部、易貢蔵布（イゴンツァンポ）の北側は今日でも「テラ・インコグニタ（未知の世界）」である。80年前のジョセフ・ロッ

クの言葉は生きている。

目を瞑ると、変化に富んだ多様性のある広大な中国南西辺境の情景――青蔵高原の東縁、チベットのアルプス、深い浸食の国、カムとアムド地方、アジアの大河の源流の山と風土――が瞼に浮かび感慨深い。６０００ｍを超える未踏峰がこれほどたくさん残っている山域が他に存在するだろうか。念青唐古拉山東部―２００座、崗日嘎布―40座、三江併流・深いゴルジュの国―20座、四川西部高地―10座を合計すると２７０座にもなる。最後の辺境と表現する所以である。チベットのアルプス、ヒマラヤと中央チベットの東端、アジアの四つの大河の源流域の山々を地図と写真で紹介する本地図集が、これから半世紀は価値を失わない作品として評価され、残れば幸いである。（中村　保、永井　剛、竹内　康之）

（山岳地図集目次）

［地理学的考察］

ヒマラヤの東とは

気象と氷河の発達

⑴中国の氷河　⑵念青唐古拉山東部　⑶崗日嘎布山群　⑷横断山脈

地形図・山峰図・行政地図

A．王立地理学協会・エベレスト基金（英国）　B．国防省地図局（米国）　C．ロシア（旧ソ連）地形図　D．中国の地形図・山岳地図

［最後の辺境］

初期の探検　登山史的背景　厄介な入域許可問題　開発のパラドックス――遠ざかる辺境

［山系と登山史の概説］

Ⅰ　中央チベットの東端と東チベット

1．ヒマラヤの東端

⑴中国・ブータン国境　⑵ガンカー・プンスム　⑶ラサの南　⑷クーラ・カンリ　⑸マクマホンラインに沿って　⑹ナムチャバルワ　⑺ギャラ・ペリ山塊　追記：郭喀拉日居

2．念青唐古拉山山系

A．念青唐古拉山西部（中央チベット東端）

⑴地理と探検　⑵初登頂の記録

B．念青唐古拉山東部（東チベット）

⑴山系の概説　⑵初期の探検　⑶科学的調査　⑷同時代の遠征

山群―1（主脈）：易貢蔵布の北西　―セプ・カンリおよびその東側の山群

山群―2（支脈）：易貢蔵布の南　―嘉黎から八松湖周辺にかけての山群

山群―3（主脈）：易貢蔵布の北　―ツァンポー・サルウィン分水嶺の主脈中央部

山群―4（主脈）：波堆蔵布の周辺・帕隆蔵布の北　―主脈最東端の山群

3．崗日嘎布山群

⑴地理的概説と探検史　⑵踏査概要とロプチン峰６８０５ｍ初登頂

Ⅱ　横断山脈―東南チベット・雲南・四川

1．深い浸食の国―ロヒト・イラワジ源流から三江併流地帯

⑴イラワジ川源流域の山（ミャンマー北部・チベット自治区）　⑵伯舒拉嶺（チベット自治区）―高黎貢山（雲南省）　⑶サルウィン・玉曲（サルウイン支流）分水嶺（チベット自治区）　⑷他念他翁山（チベット自治区）　⑸怒山（チベット自治区―雲南省）　⑹芒康山・雲嶺（チベット自治区―雲南省）　⑺玉龍雪山と中甸高原（雲南省）

2．四川省西部高地（揚子江流域）

2―1　金沙江と雅江の間

⑴雀兒山山群

⑵沙魯里山山系

①崗嘎山塊　②扎金甲博山塊　③夏塞山塊　④央莫龍山塊　⑤⑥相丘切克山塊　⑦格峰および北側の山塊　貢嘎雪山

2―2　雅礱江と大渡河の間

⑴工卡拉山山群　喀洼老熱

⑵大雪山山系

①海子山（雅拉山）―ジャ・ラ　②

夏羌拉山塊　③蓮花夕照連山　④ラモ・シェ（田海子山）山塊　⑤ミニヤ・コンカ（貢嘎山）山群　⑥中人峰山塊

2―3　大渡河の東

⑴チョンライ山―四姑娘山と岩峰群

①四姑娘山　②岩峰群

⑵大渡河流域の山

⑶珉山山塊

Ⅲ　アジアの大河の源流域

A．各拉丹東山塊―唐古拉山山系⑴―揚子江（長江）水源

B．布加崗日―唐古拉山山系⑵―サルウィン川（怒江）源流部

C．メコン川（瀾滄江）源流―水源と山塊

1．メコン川水源探査の歴史

2．メコン川源流の山々

⑴曲阿加吉瑪山塊

⑵色的５７７０ｍおよび５８７６ｍを最高峰とする山塊

⑶昂爪涌曲・昂納涌曲源流の山塊

D．アムネマチン（瑪卿崗日）―かつての謎の山

E．年保玉則・青海省―鋸の歯のような岩峰群

年保玉則の登攀史　将来のクライミング・パラダイス

会員山行記録

（山行幹事／本間浩　記）

●「ＦＮ短大」の記録

３月23日（日）　ＦＮ短大「本社ケ丸・清八山」

笹子駅―角研山―本社ケ丸―清八山―笹子駅

Ａ　中村　藤原　前嵩西（特待生）　上記コース

Ｂ　佐薙　本間　　Ａ班とは逆コースを行く。変電所までタクシーを利用、本社ケ丸～角研山間ですれ違い、大月の「母ちゃん食堂」で会い反省会。残雪多く苦労する。

６月21日（土）「沢登１　軍刀（ぐんだり）利沢（南秋川）」

藤野駅＝鎌沢入口～三国山～矢川林道～軍刀利沢～石楯尾神社＝上野原駅

参加者＝藤原、長島、太田、高橋、上

茅丸から矢川林道への道が一部崩壊してルートファインディングに苦労した。軍刀利沢も倒木が多く、障害物競争の感あり。「初めて」もあり滝の登攀には皆苦労していた。

６月29日（日）「大岳山」

奥多摩駅～鋸山～大岳山～馬頭刈尾根～軍道～食堂天芳（打ち上げ）～五日市駅

参加者＝中村、藤原、宮武、太田、西山、上、大矢、前嵩西（特待生）

短大１学年の最終登山であり、それに相応しく馬頭刈山から雨になり短大初めての悪天候下での行動経験となった。

７月21日（日）「石津窪（南秋川）」

五日市駅～今熊山～刈寄山分岐～石津窪～臼杵山～戸倉城山～五日市駅

参加者＝中村　藤原

真夏の８時間行程はキツイ。

８月７日（木）「権現山（八ケ岳）」

天女山～三頭山～権現山　往復

参加者＝藤原　太田

８月20日（水）「水無川本谷（丹沢）」

大倉～戸沢～水無川～塔ノ岳～大倉

参加者＝中村、藤原、太田

真夏の９時間の行動で、体力の限界。

９月23日（火）「川乗谷　逆川」

９月26日（木）「奥武蔵・日和田山」

９月28日（日）「相模湖～高尾山」

●会員・部員合同山行

７月６日（日）「谷川　雪渓訓練」

参加＝中村（雅）、藤原、前神、学生＝高橋、

太田、上、鈴木

マチガ沢での雪渓訓練の予定であったが、悪天による2回の延期で7月にずれ込みマチガ沢には雪が残っていなかったため一ノ倉沢で実施した。7月の雪は硬く、雪渓訓練よりアイゼン練習に向いていた。来年以降は5月～6月上旬にマチガ沢で実施したい。雪渓訓練内容は雪渓歩行・ピッケル使用滑落停止・グリセード。

8月4日～5日「廻り目平テント合宿」

4日A班（宮武車）　黒富士・升形山。宮武、（学生）高橋、西山、太田

B班（電車）ミズガキ山荘～大日岩～廻り目平。藤原（大日小屋で合流）、（学生）長島、辰川、上

両班とも風林荘（藤原山荘）庭でテントを張り自炊（カレー）した。夜は宮武氏による「山讃賦」の歌唱指導があった。これには北岳バットレス四尾根登攀を目指し訓練のため滞在中の竹中会長も参加。

5日A班　金峰山。宮武、高橋、西山、太田

B班（クライミング）　藤原、竹中、長島、辰川、上。廻り目平でフリークライミングとボルダリングを行う。

8月24日（日）～25日　「第2回マーキュリーMt．富士」

一橋山岳部＝長島（L）、高橋、西山、太田、辰川、上、岡田、中野、大谷

針葉樹会＝宮武、高崎（治）、小島、藤原

一般学生＝9名

24日　国立＝バス＝御殿場口5合目～8合目「トモエ館」

25日　8合目～富士山～5合目＝バス＝国立

前夜来の雨で、御来光は諦め、とにかく山頂だけを目指すことにした。高山病で4名が山頂に行けないというキツイ山行だったが、入部希望者が一名いたのは望外の喜びであった。下山後5合目で高崎先輩・小島先輩より振るまわれた生ビールの乾杯で今年の「Mt．富士」を締めた。

9月12（金）～15日（月）「涸沢合宿」

参加＝宮武　（学生）太田、渡辺

12日　宮武車で国立を出発。松本で食糧買出。沢渡からシャトルバス。上高地～徳澤テント設営

13日　徳澤～横尾～涸沢テント設営

14日　涸沢～ザイテン～北穂高～南陵～涸沢

15日　涸沢～ザイテン～奥穂高～前穂高分岐～重太郎新道～上高地

4日間とも好天に恵まれ、北アルプスが初めての学生二人はその展望に「日本にもこんな風景があるのか！」と感激。一方涸沢岳から北穂高の稜線は崩壊が進んでいて気を締めて歩く。ここだけでなく二日間は岩稜歩きの連続で非常に緊張し、上高地下山時には3人ともホッとした。

●懇親山行 越後シリーズ第8弾 粟ケ岳・弥彦山

今回の「越後」は粟ケ岳１２９２ｍ・弥彦山６３４ｍと高い山ではないのですが、共に頂上を踏めず登山勝負で云えば惨敗でしょう。しかし山行の内容から言えば充分に楽しめ満足できる結果を収めたと思います。これは三条市在住の加藤さんの協力・参加のお蔭と感謝しております。地元を良く知っている人が居る事は有難いもので、登る山は勿論、旅館・交通手段の選定と計画段階からすっかりお世話になりました。

当日の山案内、夕食時の越後紹介と話はつきませんでしたが、中でも上杉謙信は居城の春日山から朝な夕なに、また合戦の前後に、南の妙高（２４５４ｍ）と北の米山（９９３ｍ）を拝んだという話が印象に残りました。この話から来年の「越後シリーズ第9弾」はこの辺にしようでは、ということになり、加藤さんの協力も頂けることになりました。有難い話です。これからは、ガイドブックと登

山地図だけの登山と異なり、広がりのある・深みのある山行が楽しめそうです。

7月26日（土）粟ケ岳（北五百川口登山口～粟石～粟薬師　往復）

参加者＝佐薙、上原、仲田、本間、小島、中村（雅）、加藤

35度を超す猛暑の登山で、途中2班に分かれたが、共に山頂までは無理でした。

27日（日）弥彦山

参加者＝佐薙、上原、仲田、本間、小島

前日とは打って変って雨。これでは山頂から佐渡ヶ島は見えないだろうと、麓の「弥彦神社」に参拝して終えた。やはりこれでは収まりがつかず、「秋、紅葉の頃にもう一度来よう」となり、現在話が進んでおります。宜しかったら、どうぞ。

●入笠山（アダージオ合宿延長戦）

金子晴彦　記

（6月7日～8日の懇親山行「アダージオ合宿」及び懇親会については会報130号に記載されています）

アダージオ合宿の翌日はぐっとくだけて、会社時代に多摩川を羽田から笠取山まで歩いた仲間達と入笠山に出かけた。幾度も眺めていながら全く登ったことの無い山だ。この日も雨が降りそうで大いに迷い前夜9時には東京組に登るのはやめようと言ったものの、朝一番で南アルプスが見事に見えたことから決行と改め、7時のあずさで出て来るように連絡した。彼らにとってこれは相当に迷惑だったかも知れないが、岡山から出て来る身にしてみればそれもやむを得ない。

茅野に出て富士見まで中央線。そこで新宿から来た皆さんと落ち合い駅前からケーブル駅までの無料送迎バスに乗る。そしてそこから頂上付近まで一気にケーブル。一連のシステムが見事に整備されているのに感心した。頂上まではなだらかな斜面を約1時間ほどの登り。圧倒的な景色が広がり、1955mという高度の体験には絶好のルートだと思われた。いずれ足腰が弱くなったらここでのんびり散歩するのがよかろうと皆で話した。

帰りはケーブル駅から10分ほど下にある温泉に入り、タクシーを呼んで富士見へ、そして新宿へ。池袋で知人のやっている画廊兼バーでしばらく過ごし、10時新宿発の夜行バスで岡山に向かった。岡山の田舎から東日本の山を登りに来るのはなかなか大変だがいかにも大歩きをしているという楽しさもある。しかもそれを格安の夜行バスで成し遂げるというのは何だか冒険心をくすぐる。今後もこんな旅が続くのだろう。

三月会通信

■2014年6月16日■

【出席者】 佐薙、上原、三井、竹中、本間、小島、佐藤（久）、岡田、宮武

●山行報告

佐薙　6／7　北八ツ、八柱山。金子さん以下8名。

6／8　北横岳。本間さん、仲田さんと。

三井　5／25　FN短大山行（石老山他）。石老山手前の嵐山は、標高が低い割に急斜面でキツかった。

竹中　5／24、25　上高地（初級登山教室、第2期）。恒例のJAC山荘に泊って、地図読み講習。翌日、徳本峠へ、雪の上をアイゼンで。

6／7―9　山梨・多摩・埼玉三支部懇親会で青木ヶ原樹海ウォーク。

6／12、13　メトロ会世話人会で学習院大・日光光徳小屋へ。13日に、光徳～三本杉～赤沼を散策

6／14　御前山（初心者登山教室第3期）。絶好の登山日和の中、のんびりサポートする（前2回の教室時には虫に悩まされた

が）。
本間　5／25　相模湖三山（相模嵐山～石割山）。FN山行
5／28　岩木山　三四郎会
5／29　白神山　三四郎会
6／1　伊豆ヶ岳（正丸峠～伊豆ヶ岳）。FN山行
6／7―8　八柱山～雨池峠。アダージオ合宿、八ヶ岳トレイル
6／8　北横岳
小島　5／28　岩木山
5／29　白神岳
6／1　夜叉神峠・高谷山
佐藤（久）　なし
岡田　5／28　岩木山
5／29　白神山
中村（雅）　5／25　相模湖駅～嵐山～石老山～石砂山～峰山～やまなみ温泉～相模湖駅（FN山行）。三井、本間、藤原、中村、学生：上　（三井、本間は石老山さんから下山）やまなみ温泉で風呂、食事
5／28　岩木山。三四郎会山行。津軽岩木スカイライン＋ゴンドラのお蔭で楽々百名山稼ぎ
5／29　白神山。三四郎会山行。ブナ原生林見事
6／1　伊豆ヶ岳（FN短大）。本間、藤原、学生＝原、高橋、上
6／4　高尾山～城山～相模湖駅。町会ハイキング（5名）
6／7　佐久平～八柱山～雨池～ロープウェイ山頂駅。懇親山行（八ヶ岳スーパートレイルウォーク）。佐薙、仲田、本間、金子、中村
宮武　なし

■2014年7月22日■

【出席者】竹中、小島、中村（雅）、宮武、高崎（記録）

▽開始時間前に遠藤さんが登場されました。遠藤さんは、他の会合の約束があるとの事でしたが、先日の総会に出席されなかった三井さんの消息をお聞きする事が出来ました。軽い脳梗塞から快復、リハビリ中だそうです。奥様の適切な対応で、救急車で入院されたものの大事にならずに済んだ、との事でした。

▽部室の外壁（丸太）の塗装がかなり傷んで来ました。大学の施設課に、外部の業者に見積りを取って貰ったところ、屋根の塗装他を含んで80万円強の回答がありました。前回は、金子さんを中心に、会員の手だけでペンキ塗りをした経験があるので、岡山から金子さんに出張してもらって、今回も会員だけで実施しようという事になりました。

▽札幌在の小野さん、東京の佐藤（久）さんを中心に佐薙さん以下総勢8名（佐薙、本間、小島、小野、佐藤、岡田、宮武、と蛭川さんの姪御さん）で、北海道の山に遠征されました。レンタカーを使って移動し、三日間連続で羅臼岳、斜里岳、雌阿寒岳の三つの山を登ろう、という意欲的な計画でした。結果は、普段の行いの良さが見事に天気に反映され、三山とも晴天に恵まれた上々の登山になった様です。皆さん満足して札幌に戻り、リハビリ中の蛭川さんを交えて、盛大な反省会をやったとか？

▽南アルプスの開山式が6月28日に執り行われ、一橋山岳会からは竹中さん、本間さん、鈴木さん（学生）3人が参加しました。翌29日には、芦安ファンクラブの清水さん以下のガイドによる「キタダケソウを観る会」があり、大樺沢を詰めて八本歯の稜線に至り、キタダケソウの群生する場所を案内してもらったそうです。大樺沢は通常よりも残雪が多く、アイゼンを装着して登った様です。

▽当初は6月初旬に予定されていたのですが、谷川岳での雪上訓練山行が7月6日に行われました。OBは藤原、中村（雅）、前神の3氏が参加、学生4名を鍛えた様です。最初はマチガ沢に入ったのですが、雪が少なく、一ノ倉沢に変更、ここも雪が少なく、少し上に登っての訓練となりました。ブロックとか落石があって、緊張する場面もあった様ですが、雪面の登降、スリップストップなど基礎技術を無事習得してもらう事が出来ました。矢張り時期が遅過ぎたので、来年は昔の様に6月初めにやろう、という話になりました。

▽8月24・25日に、今年も現役の学生を引率して富士登山が実施されます。現時点では、学生山岳部員が12名、一般学生が13名、参加が予定されています。これだけの大人数になったので、全員が無事に登頂し、無事下山する為には、若手OB・OGの積極的な参加が期待されます。参加して頂ける会員は、宮武さんに連絡して下さい。

▽これから秋にかけて、8月初旬には廻り目平、9月中旬には涸沢、10月初旬には再び廻り目平、と現役・OBを交えた山行が計画されています。現在、現役部員は16名が在籍し、また未経験者が多いので、安全な登山を楽しく実施する為にも、富士山同様に若手のOB・OGの参加・支援をお願いしたいと思います。我こそは、と思われる方々は、山行幹事にご連絡下さい。

▽これだけ学生の部員が増えたのだから、その昔の様に、針葉樹会費の徴収を学生にも手伝ってもらう事も考えてはどうか、というような話が持ち上がっています。部員全員がそれぞれ何人かの先輩を担当し、都心の事務所に押し掛けて、昼飯を御馳走になりながら山登りの話を伺ったものです。会費の徴収だけでなく、将来の就職にまつわる話も出来る訳で、現役とOB・OGとの懇親を深めるにも役立つのではないでしょうか。

●山行報告

竹中　6／23、24　玄倉林道～ユーシンロッジ（泊・宴会）～雨山峠～寄。SAC（住高山岳部）OB橋本氏快癒祝い。（針葉樹会：本間、岡田）、SAC（橋本、門脇、荻野）

混成部隊。雨山峠～寄の間の河原歩きは厳しい所も。

6／28、29　芦安ファンクラブ主催キタダケソウ観察会

本間さん、鈴木君（1年）と。広河原での開山式に出て

小島　7／3―8　羅臼、斜里、雌阿寒。佐薙さん、本間さん他と

中村（雅）　6／29　鋸山・大岳山（FN短大）。藤原、宮武、中村、（学生：西山、太田、上、大矢、他1名）

奥多摩駅～鋸山～大岳山～つづら岩～馬頭刈山～五日市駅

7／6　谷川岳（一ノ倉沢）雪上訓練。藤原、前神、中村

（学生：太田、高橋、上、鈴木）

7／6　高尾山。家内の白山行足慣らし。

高尾山口～稲荷山コース～高尾山～4号路～1号路～高尾山口

7／21　盆堀川、石津窪（沢登り）。藤原さんと二人。五日市～今熊山～刈寄山手前～石津窪～臼杵山～戸倉城山～五日市。滝三つはザイル確保で直登

宮武　7／3―8　北海道　羅臼、斜里、雌阿寒。小野さんの先導で無事終了。最終日、札幌では蛭川さんと合流（夜）

■2014年8月18日■

【出席者】佐薙、上原、竹中、小島、佐藤（久）、岡田、中村（雅）、宮武、高崎（記録）

▽まず、今頃は表銀座の稜線歩きをされているはずの本間さんからの言付けが伝えられました。11月22日（土）から23日（日）にかけて、「石井さん・山崎さん・山本（健）さん追悼山行」を奥多摩・数馬（三頭山の麓）で計画している。宿泊は「蛇の湯　たから荘」。土曜日の夕方に現地集合、翌日曜日に近くの山を登ろう、というものです。詳細計画は、後程、本間さんから提案されます。宿泊先が〝有名な宿〟なので早めに予約を入れたいそうです。参加を希望される方は（まだ先の話なので拘束するものではないそうですが）早めに手を挙げて下さい（本間さんに直接連絡して頂くのがベストです。パソコンも修復済みです）。

▽8月下旬にＮＭＫＢ（中川記念北岳バットレス行）の話もありましたが、現時点（8月25日）では、天候不順のため、9月上旬に延期されているようです。夜叉神峠トンネルを出た後の野呂川林道が土砂崩壊のため、広河原までのバスの運行が始まっておらず、アプローチは奈良田経由になるようです。その昔、ウォルター・ウェストンが北岳に登った時のルートは夜叉神峠を通っていないはずで、前衛の山を何処で越えて広河原に下りたのだろうか？（１９０２年8月18日から27日、ウェストンが芦安～杖立峠～広河原～大樺沢～小太郎尾根のルートで北岳へ登頂という記事がありました）

▽7月下旬に予定されていた「越後シリーズ」は、天気に翻弄されて、上首尾とは行かなかったようです。1日目（土曜日）は、異常気象のあおりを受け、気温が高過ぎて、途中の粟薬師堂まで登った所で断念。翌2日目は雨・風で行動出来ず、弥彦神社へ参拝するのみ、だった。越後（三条市）在住の加藤さん（昭和51年卒）が参加され、「来年は私が計画しよう！」という言葉を土産に引き上げる事になったようです。

▽8月24・25日に予定されている「一般学生を勧誘して富士登山」に因んで、佐薙さんから「グリセミック指数（食品のＧＩ値）」を知っているか？　との質問が出ました。出席メンバーは全員、聞いた事もない言葉でした。「炭水化物が消化されて糖に変化する速さを表す数値」だそうです。例えば、意気込んで「これから登るぞ！」の時に、「握り飯」を食べるよりは「アンパン」を食べる方が効果が上がる、という話です。ＷＩＫＩによれば「炭水化物50グラムを摂取した際の血糖値上昇の度合を、ブドウ糖を１００とした場合の相対値で表す」とあります。アンパンは95、精白米は84、ジャガイモは90、チョコレートは91、等々。

▽上記の富士登山には、ＯＢ4名（高崎（治）、小島、宮武、藤原）、学生山岳部員10名、一般学生9名、合計23名の参加が予定されています。トップとラストを若手（？）ＯＢで固め、ゆっくりとしたペースで登る事、途中で高山病の症状が出た時に備えて「携帯酸素ボンベ」を持参する、等々の対策が考えられています。ゴミを持ち帰るための「クリーン袋」も登山者に配る予定です（8月25日に無事登頂・下山）。

▽「芦安ファンクラブ」等と実施する予定の夜叉神峠周辺の登山道整備事業は、今年は11月15・16日に行われる事になりました。

▽北海道で、羅臼・斜里・雌阿寒の三峯を満喫された宮武さんから「アマツバメ」の話、佐薙さんの追補。「アマツバメ」は「ツバメ」の一種ではないこと。分類上、「ツバメ」は、鳥類・スズメ目・ツバメ科・ツバメ属・ツバメ種。「アマツバメ」は、アマツバメ亞目・アマツバメ科・アマツバメ亞科・アマツバメ属・アマツバメ種。全く異なる種である事。ＷＩＫＩの記述では、「岩壁等にしがみ付いてぶら下がるように止まる。地面に降りると、脚で歩いたり羽ばたいて飛び立ったりできない。交尾や睡眠を飛びながら行なう事もある。また、飛行速度は１０６Ｍ

ＰＨ（１６９㎞／ｈ）に達することもあり鳥類の中でも最速の部類に入る」。英名は飛行速度が速い事から「ＳＷＩＦＴ」と呼ばれているようです。ちなみに、高山で我々も良く見かける「イワツバメ」は、ツバメ科、ツバメ亜科、Delichon 属、イワツバメ種、です。

▽朝日連峰の縦走、赤木沢の遡行への数年に渡る挑戦、を一緒にやり遂げられた三人組（小島さん、中村（雅）さん、川名さん）が今年の夏は白山に行かれました。白山は信仰の山としても有名ですが、白装束の登山姿は木曽御岳よりはむしろ少ない位だったとの話でした。登頂後は、三者三様でそれぞれ無事に下山されたようです。

▽その昔は、雪の山にはスキーを使って入山するのが普通でした。昭和30年代の後半から、この形が徐々に薄れ、昭和40年代にはいると全く行われなくなったようです。入山時はまだしも、下山時には、「お先に！」と言って出発したものの、転ぶ度に顔・身体の雪を払い、キスリングを背負い直し、スキーを履き直し、しているうちにワカン組に追い越された、という話も残っています。最近は、スキーの道具も良くなって、昔に比べて短くなった「カービング」スキーに、接着型シール、スキー用のアイゼン、山スキー用の締め具を使えば、スキー登山も楽しいぞ、だそうです。

▽２０１２年10月15日の三月会で佐薙さんが紹介された吉田博の木版画「劔山の朝」Ｂ４版を中村（雅）さんが持参されました。朝日新聞販売店から無料で配布されたものです。「劔山の朝」は、吉田博が自らの監修による木版画を制作発表するようになって、最初に出したシリーズ版画集「日本アルプス十二題」（大正15年）の一つです。佐薙さんはこの絵がどこから見た風景か特定する為に昨年鹿島槍に行き写真を撮られました。その写真を持参されたので皆で木版画と見比べました。布引山から見た景色ではないかとの意見が強かったですが見たままでなくイメージで書いたのではとの意見も出ました。これから鹿島槍に行く人にはこの木版画のコピーを持参し見比べることをお薦めします。

●山行報告

佐薙　7／26、27　越後シリーズ。7／26　粟ヶ岳、7／27　弥彦神社

上原　7／26、27　越後シリーズで粟ヶ岳、弥彦神社

竹中　8／3、4　川端下、楓林荘（藤原別荘）～廻り目平　ストリームサイドの岩場。ＮＭＫＢのトレーニングで風林荘に宿泊して岩登り。ボルダー岩を巡る。学生のテント訓練も見学。

小島　8／1、2　白山　7／26、27　粟ヶ岳　途中まで、弥彦神社　アラシ

佐藤（久）　なし

高崎（俊）　なし

岡田　なし

中村（雅）8／1～3白山。7／31　夜行バスで金沢へ、8／1　金沢～別当出合～砂防新道～白山室堂。8／2　御前峰でご来光～南竜ヶ馬場テント場。小島さんは往路を別当出合へ下山後帰京。8／3　川名さんはチブリ尾根下山。中村夫妻は大倉尾根を大白川に下山

宮武　8／4、5　廻り目平テント合宿。学生６人と金峰山

■２０１４年９月16日■

【出席者】 佐薙、本間、宮武、高崎（記録）

▽異常気象の夏もそろそろ終わりか、と思われる気候になりました。今回は、竹中さんがＪＡＣの支部活動、佐藤（久）さん、岡

田さん、中村（雅）さんの三人はカラコルム遠征中、と常連のメンバーが欠席となり、出席者が少なかったのですが、話は弾みました。

▽現役学生部員の涸沢合宿に参加された宮武さんから、山行の様子が紹介されました。上高地、涸沢からの穂高岳の景色に「日本にもこんな風景があるのか！」と学生さん達は痛く感激した様です。涸沢に幕営して、北穂高を、ザイテン・グラート～穂高小屋～涸沢岳～北穂高～南稜のコースで周回した、涸沢岳から北穂高に連なる稜線歩きは、崩壊が進んでいる様で緊張した、参加した学生は二人だったのでどうにか面倒を見られたが、当初計画の様に四人だったら、目配りが十分出来たかどうか心配になった、ザイテン・グラートから奥穂に向かった時は、登山者が多く渋滞して、コースタイムの倍以上の時間を要した、等々。今後暫くは、学生部員育成のために、このような「合宿」には、複数の動けるＯＢの参加・指導が必要の様です。

▽北岳バットレスに挑戦した「中川メモリアル北岳バットレス（ＮＭＫＢ）第４尾根登攀」隊は、今回も天候に災いされて、登攀を断念されました。遥々岡山から参加された金子さんは、バットレス断念後、健脚を生かして大樺沢から白根三山の稜線を農鳥小屋まで歩き、翌日農鳥岳登頂後、八本歯のコルから二俣経由広河原に下山。本間さんと学生の太田君は、大樺沢を登り、北岳山荘に（太田君は持ち上げたテントに）泊まり、翌日、北岳を登頂して後、右俣を下り、御池小屋に宿泊。翌日、広河原から芦安に出て「芦安山岳館」を見学の後、帰京されました。「ＮＭＫＢ」は10月初旬に再挑戦の計画があるそうです。

▽８月24～25日に実施された「一般学生を勧誘して富士登山」は、参加した学生20名の内二人が軽い高山病で登頂を断念しましたが、他の皆さんは無事登頂され、風雨のため「お鉢巡り」は叶わなかったものの、予定通りに下山しました。付き添い（？）のＯＢ連は思い通りに身体が動かない（前日の深酒が祟った？）メンバーも出て、全員登頂までは行かなかった様でした。詳しい話は、直接、当事者からお聞き下さい。高山病は、症状が出たら下りるしかありませんが、一般的に標高５００ｍ下れば治る、という話があります。藤原さんが、罹患した学生と一緒に下り、これが実証された、という余談がありました。

▽この富士登山で陰の主役である佐薙さんから、「富士山検定１級」の後継者に宮武さんが指名されました。これまでの経緯から断る訳には行かない様です。加えて、中学１年の孫娘が夏休み「自由研究」のテーマに「火山」を選び、実地検分のために鳴沢熔岩樹型、白糸の滝を案内したそうです。佐薙さんの７月１日の国立キャンパスにおける講義内容が大いに役立ち「お爺ちゃん凄い物知りだね！」の評価を得て、まんざらでも無い様ですが。

▽この夏、北海道で羅臼・斜里・雌阿寒の三峯を制覇された佐薙さんは、「日本百名山」に拘ってはいないが、北海道にある九つの「百名山」で残っているのが十勝岳のみになったそうです。夢は未だ未だ続きます。

●山行報告

佐薙　なし

本間　８／18～20　蝶ヶ岳～常念岳。燕までの予定が雨で途中まで。

８／22　宝永火口、宝永山。神積会ハイキング

９／５～８　北岳とその周辺。学生と二人

高崎　なし

宮武　８／24、25　マーキュリー富士登山

一橋山岳部コーナー

富士山御来光ツアー

長島弘賢（商学部4年・部長）

参加メンバー＝OB：高崎治郎（31年）、小島和人（40年）、藤原朋信（44年）、宮武幸久（45年）

学生部員＝4年：長島、3年：高橋、西山、太田、2年：辰川、中野、上、岡田、1年：大矢

一般学生＝修士1年黄勉、3年：菅沼祐作、志村幸祐、2年：前川大、宮西達也、小塚満里鈴、水上奈々、1年：大楠康平、内海拓人

行程

8月24日　8時20分国立発、11時30分河口湖五合目登山開始、15時50分八合目白雲荘、16時30分本八合目トモエ館着

8月25日　5時トモエ館発、6時吉田口富士山頂上着、6時30分頂上発、7時トモエ館着、9時7合目着、10時5合目着、11時15分五合目発

一昨年の第一回富士山御来光ツアーに引き続き、今年も第二回富士山御来光ツアーを開催した。普段の山行とは異なり、一般学生を交えての山行であり、また初の富士山登山の学生が多かったため、事前準備を前々より進めていた。今回はその事前準備のことを含めて山行記録を書きたいと思う。

富士山御来光ツアーの準備を始めたのは、今年の2月頃であった。部員の原が富士山御来光ツアーのチラシを作成した。そして宮武さんにたくさんのチラシを刷って頂いた。4月に入り、私の就活も終わり、本格的な富士山御来光ツアーの一般学生の参加者集めに入った。一学年上の小宮山さんのアドバイスを踏まえ、部員の友人のネットワークを利用して一般参加者を募るようにした。また、チラシもあるので、部員同士で協力し合い、学内の目のつくところすべてに貼り、また講義を受ける教室にも多くチラシを配布した。月に一回の部会では、富士山御来光ツアーの参加者獲得進捗状況を必ず確認し、部員による参加者集めを促した。こうした取り組みの結果、9名の一般学生の参加者を獲得することに成功した。第一回との参加者の大きな違いは、院生でありかつ中国からの留学生・黄さんの参加である。また、チラシを見て参加したいとの学生もいて、チラシの宣伝効果を改めて実感した。全面カラー印刷にして頂いたおかげで、学内に無数に存在するチラシよりもはるかに目立つものとなり、多くの学生の目に留まった結果である。一般学生が9名の参加で、部員が9名の参加、計18名の学生の参加は、第一回の御来光ツアーの時よりも多くの学生が参加する結果となり、とてもよい

富士登山道

ものであった。

そして、今年の富士山御来光ツアーでは、7月1日に佐薙さんによる富士山御来光ツアーの事前説明会も開催した。そのために、空き教室の確保や参加者募集のチラシの作成、そしてチラシの配布、学生支援課との交渉などを行った。初めての試みで、慣れない点もあったが、当日は50名近い参加者で、無事に進行することができた。この佐薙さんの講演を聞いて、富士山御来光ツアーに参加したいと意思を固めた参加者もいたので、非常に意義深いものであった。

そして、8月24日の当日朝8時にはOBの方4名と、部員9名、一般学生9名が国立の西門前に集合し、8時30分に富士山五合目に向けてバスで出発した。途中の談合坂で休憩をとり、大きな渋滞もなく、11時には富士山吉田口五合目には到着した。初めて登る部員も一般学生も五合目が観光地化しており、多くの外国人がいることに驚いていた。18名の参加者を三チームに編成し、各チームのリーダーを任命した。そのチームを中心として登るように指示をした。そして、その場で各自装備と登山をする際の注意点を確認し、登山口で集合写真を撮り、11時30分山行を開始した。

今回の山行は、部員とOBによる普段のFN短大の時のように1時間に一回の休憩ではなく、30分に一回休憩を入れるというゆったりとしたペースで歩くことにした。それは、私はこの御来光ツアーの一週間前に、個人的に友人と富士山を登った際、初心者は1時間に一回休憩を入れて歩くのではバテてしまうという経験を踏まえたものであった。また高山病を防ぐ為、事前準備の際、買い揃えていた酸素ボンベも休憩の度に吸うことにした。

富士山頂

24日は快晴で、休憩の度に富士山の良い景色を眺めることができ、学生たちも富士山からの眺めの良さに感動していた。最初の休憩ポイントである6合目付近には12時ごろ到着し、そこで昼食とした。その場では、OBの高崎さんから印象的な自己紹介の秘訣を伝授して頂き、それを踏まえ、学生同士でもお互いに自己紹介をした。6合目からはいよいよ本格的な登山となり、少し急な上り坂を延々と歩いて行った。その際も、30分に一回の休憩のペースは崩すことなく上るようにした。初日は大きな団体も少なく、大した混雑もなく順調に登ることができた。7合目に到着する手前のポイントで高崎さんと小島さんと部員の辰川といったん別れ、学生17名と宮武さんで本八合目のトモエ館を目指した。7合目からは山荘と急激な岩場の連続であったが、特に問題なくスムーズに登り進めることができた。そして、16時30分に本八合目トモエ館に到着した。山荘に到着した際は、多くの学生が疲れている様子であったが、大きな事故もなく、また高山病にかかる者もなく無事に到着することができた。やはり、30分に一回休憩を入れるペースで登ったためではないかと思う。17時ごろには、7合目付近で

別れた辰川とトモエ館で合流することができた。

山荘では三部屋に分かれ、各自の寝床を確認した。山荘での寝泊りを初めて経験する者が多く、とても狭い寝床に戸惑う学生も少なくなかった。18時には夕食にハンバーグ付のカレーを食べた。部員の中には追加で山菜うどんや豚汁等を注文する者もいた。山荘での夜は早く、20時前には皆就寝した。しかし、初めての山荘であり、かつ窮屈な寝床のため、眠りにつくことができない学生が多く、朝まで山荘付近で起きている者も少なくなかった。

翌25日は天候が悪く、登山の安全を考慮した結果、頂上にて御来光を仰ぐことを諦め、5時起床とした。激しい雨と風であったため、トモエ館の従業員に交渉し、荷物をトモエ館に預けて、山頂まで登ることにした。また、二名の学生が体調不良となったため、その二名をトモエ館に残して、16名の学生と宮武さんと藤原さんで山頂を目指すこととした。山頂までの道のりは、険しい山道で、かつ非常に冷え込んでいたが、重い荷物がなかったため、皆快調に登ることができた。

そして6時に富士山吉田口山頂に到着した。山頂付近は非常に冷え込んでいたため、山頂の山小屋で、暖をとることにした。その山小屋で、豚汁やラーメン、おしるこを頂くことにした。そして、暖を取った後、全員で集合写真を撮り、早々に下山を開始した。7時にはトモエ館に到着し、荷物を受け取り、体調を崩していた学生とも合流して、下山を開始した。下山は学生にとっては負担が軽く、順調に下山することができた。10時には五合目に到着することができた。そこで高崎さんと小島さんと合流し、ビールを頂きながら、昼食をとった。学生に話を聞くと、初めての登山でとても疲れたがいい思い出になったとの声が多数あり、第二回富士山御来光ツアーを開催して、本当に良かったと思う瞬間であった。また、1年の内海がこのツアーを機に、山岳部に入部するとの意思を固めてくれた。

今回の富士山御来光ツアーは、前回よりも多くの学生参加者で開催することができ、かつ新たな部員を迎え入れることもでき、非常に意義深いものであった。心残りは、やはり山頂で御来光を仰ぐことができなかったことだが、それは次の機会に譲りたいと思う。

反省点は、部員が一般学生をしっかり引率することができていない時もあったということである。各チームのリーダーは、点呼等は率先してやってくれてもいたが、部員が一般学生を引率しているという意識が少し希薄であったと感じた。次回は部員がもっと今回の経験を生かして、一般学生を引率していってくれれば、と思う。

また、参加者が部員9名と一般学生9名であった点だが、次回は合計20名以上の参加を目指してもらいたいと思う。そのためにも、チラシ等を使った広報は非常に重要になると思う。さらに、今回のツアーはバスや山荘の手配等、宮武さんをはじめとするＯＢの方の多大な協力のもとで行われたものであるが、次回以降は部員が今回の経験を生かして、率先してツアーの計画や山荘等の手配などを行ってくれればとも思う。

最後に、今回第二回富士山御来光ツアーを開催するにあたり、多くのＯＢの方に協力して頂いた。事前講演会においては、佐薙さんに講演をして頂き、当日のツアーでは、高崎さん、小島さん、藤原さん、そして宮武さんに多大な協力をして頂いた。特に、ツアーの計画や山荘等の手配、募集チラシの作成、当日の進行等をして頂いた宮武さんには、大変お世話になった。この文面においてではあるが、改めて、ＯＢの皆様にお礼を申し上げさせて頂きたいと思う。

会務報告

針葉樹総会

２０１４年７月14日　於：如水会館記念室

出席者＝名和泰三（特）、石原　脩（昭30）、高崎治郎（昭31）佐薙恭（昭31）、上原利夫（昭33）、丸山則二（昭33）、塩川清彦（昭33）、永井新也（昭36）、仲田修（昭36）、遠藤晶土（昭37）、高橋信成（昭38）、竹中彰（昭39）、小島和人（昭40）、本間浩（昭40）、三森茂充（昭40）、高崎俊平（昭41）、佐藤久尚（昭41）、原博貞（昭41）、岡田健志（昭42）、吉沢正（昭42）、中村雅明（昭43）、宮武幸久（昭45）、西牟田伸一（昭47）、井草長雄（昭48）、松尾信孝（昭48）、川名真理（昭63）、糟谷知紀（平22）、山根範子（平24）　以上28名

▽学生＝長島弘賢（商４）、伊藤久裕（商４）、吉川悠太（商４）、原萌子（社３）、高橋直道（法３）、西山祥紀（経３）、太田貴之（商３）、辰川貴大（法２）、中野広美（商２）、上茂衡（法２）、大谷彩子（商２）、岡田尭之（経２）、大矢和樹（法１）

※正会員総数１４３名。出席会員28名、委任状提出会員60名の計88名。よって会員の３分の１以上の出席を要する総会成立条件を満たす。

１．平成25年度活動報告

⑴総会、幹事会

①幹事会(第１回)２０１３年６月７日(金)

②幹事会(第２回)２０１３年６月14日(金)

③総会　　２０１３年７月９日(金)

＊幹事会決定・承認事項の報告、平成24年度活動報告、平成25年度活動計画等の全議案は、全会一致で承認された。

＊また、会の財政改善（同期・卒年次の近い会員間で納入奨励）、夜叉神峠周辺の登山道整備（規模を縮小して継続する）、学生支援活動（若い・動ける会員のサポートが欲しい、「手取り足取り」の指導が必要、装備の拡充が急務）が討議され、25年度の活動に反映させる。

⑵学生（一橋山岳部）支援

２０１３年６月29日に山岳部室で学生・ＯＢの会合を持ち、具体的な支援策をまとめた。

出席者＝中村（雅）、宮武、前神、兵藤、川名、（学生）小宮山、町田、峯、原

①活動報告・計画……山岳部としての活動計画・報告を作成する。役割分担を明確にする。日本山岳会学生部と連携する。

ＯＢの支援を積極的に利用する。

②会計報告等……事務的なミスハンドリングを無くす。大学体育会からの補助（現物支給）を活用する。団体・個人装備について、ＯＢに寄付をお願いする。

また、２０１４年５月11日に都心（赤坂）で会合を持ち、下記の事柄を話し合った。

出席者＝本間、中村（雅）、宮武、前神、古田、（学生）長島

①６月の雪上訓練のやり方を含み、今後の学生の山行計画。

②マーキュリー富士登山（８月24、25日を予定）。

③部会のあり方。

④共同装備と個人装備。学生で不足している必須装備の調達。

⑶平成25年度の創部90周年記念事業計画

夜叉神峠周辺の登山道整備

２０１３年９月21、22日の２日間、芦安ファンクラブ、富士通アイネットワークシステムズと合同で、檜尾峠から高谷山に至る登山道の整備を行った。２日間延34名が参加、うち一橋山岳会からは学生２名、会員７名が２日間参加。

また２０１４年４月13日、芦安ファンクラブと共同で高谷山に道標を建立した。会員８

名が参加。

⑷懇親山行

①２０１３年12月１日　冬の山行：九鬼山、富士山の展望を楽しむ。

⑸学生との合同山行

①２０１３年８月２～７日　黒部川赤木沢遡行、裏銀座縦走。会員５名、学生２名（太郎平から薬師岳登頂）

②２０１３年10月13日　大平山、石割山。会員２名、学生１名　「中村学校開校記念山行」

③２０１３年10月18～20日　廻り目平合宿。会員８名、学生４名、他２名。茂来山、飯盛山、横尾山、小川山、金峰山、等

④２０１３年12月５日　岩登り訓練、広沢寺クライミング。会員１名、学生１名

⑤２０１４年１月12日　鎌倉アルプス４コース完全縦走。会員10名、学生２名、他２名

⑥２０１４年１月19日　高水三山縦走。会員２名、学生２名

⑦２０１４年２月８日　雪上幕営訓練（悪天候により国立にて）。会員１名、学生２名

⑧２０１４年２月11日　高川山～岩殿山。会員３名、学生２名

⑨２０１４年２月27日　川乗山。会員２名、学生１名

⑩２０１４年４月１日　岩登り訓練、日和田山。会員１名、学生１名

⑪２０１４年４月６日　百蔵山～扇山。会員３名、学生３名

⑫２０１４年４月12日　鷹ノ巣山。会員１名、学生３名

⑬２０１４年４月20日　金時山。会員３名、学生４名、体験者３名

⑭２０１４年５月５日　川乗山。会員２名、学生２名、体験者２名

⑮２０１４年５月14日　岩登り訓練、幕岩。会員４名、学生１名、体験２名

⑯２０１４年５月18日　生藤山。会員５名、学生８名

⑰２０１４年５月25日　石老山。会員４名、学生１名

⑹会合

①２０１３年６月29日　山岳部との協議（前出）

②２０１３年11月３日　月見の宴　会員12名、学生８名

③２０１４年１月23日　新年会……会員

総会出席者

21名、学生8名、中村(保)さん講演(梅棹忠夫「山と探検」文学賞、メコン青海四川4500㎞ほか)

④2014年3月27日　追い出しコンパ　会員5名、学生2名

⑤2014年5月10日　山岳部との協議(前出)

⑥2014年5月17日　新緑の宴　会員14名、学生10名

⑦毎月、第三月曜日　三月会

(7)出版物

『針葉樹会報』の発行

127号　2013年6月発行

128号　2013年10月発行

129号　2014年3月発行

(8)図書

①「針葉樹文庫」(芦安山岳館)のメンテナンス(戦前の会報の製本)

②山岳部室蔵書の管理(蔵書一覧の完成)

③会員の山岳図書の寄贈先として岡山市のM山岳図書館(守屋益男氏私設図書館)を選定

(9)ホームページ

『記録・資料』に「小谷部全助」資料(山日記、家系図等)の掲載ほか

(10)会員の異動

①新入会員

小宮山尚与志　平26卒　三菱商事

峰　弘卓　平26卒　JR西日本

②会員のご逝去

林　正敏(S17)　2013年4月10日

関　恒義(S23)　2013年10月23日

2．平成25年度決算報告及び遭難対策基金収支報告　別紙参照

3．平成26年度活動計画

(1)学生(一橋山岳部)活動の支援

①学生との合同山行

2014年7月6日　谷川岳(マチガ沢・一ノ倉沢)雪上訓練

2014年8月上旬　雲取山　テント生活

2014年08月24、25日　第2回マーキュリー富士登山

2014年9月13～15日　涸沢幕営、穂高岳登山

2014年10月3、4日　廻り目平OB学生合同合宿

2014年12月12～14日　八ヶ岳アイゼン訓練合宿

なお、山行だけでなく部室での座学実施も検討。

②登山訓練参加費用の補助

日本スポーツ振興センター国立登山研修所や他の機関での研修受講を促す。研修費用や付随費用の一部を補助する。(2万円／人／回、合計10万円を予算計上)。

③部員急増により各OBからの学生への装備の寄贈、寄付を今後も継続。

(2)平成26年度の創部90周年記念事業計画

①過去2年間の作業で「夜叉神峠→高谷山→芦安トンネル東口」の周回路の基礎ができた。冬季も含めこのルートを利用する一般登山者が増えたと芦安関係者から評価されている。今年度は、15万円の予算で以下の作業を計画させて頂きたい。具体的な作業内容は、共同作業をする芦安ファンクラブ、富士通アイネットワークシステムズと相談して決めていく。

▽2014年7月　高谷山→檜尾峠→トンネル東口の補強

▽2014年9月　高谷山←→カンバ平間の山道の修復

②一般学生募集富士登山(第2回マーキュリー富士登山)と事前講習会の開催

針葉樹会平成25年度　一般会計決算(案)　　2014. 7. 14

（平成25年6月1日～平成26年5月31日）　　（単位　円）

支出			収入			
項目	実績	予算	項目	実績	予算	
会報発行費	328,850	420,000	前年度繰越	1,108,502	1,108,502	三菱東京UFJ　1,108,502円
山岳部補助	100,000	100,000	納入会費	1,694,100	500,000	
通信連絡費	15,962	30,000	（普通会費）	(493,000)	400,000	今年度会費支払者73人、内翌年度以降分前払者2
慶弔費	4,882	30,000	（賛助会費）	(1,201,100)	100,000	昭34年卒市川陽一様(100万円)ほか21名
学生保険補助	30,900	48,000	会合余剰金	30,015	40,000	
日本山岳会費	36,420	36,000	預金利子・利息	157	300	針葉樹会報　127号、128号、129号分
Home Page年間維持経費	70,420	70,000	会報販売代金	0	9,000	
図書関係費用	14,762	20,000	寄付金	80,000	0	故中村宣幸様ご遺族
芦安登山道整備	150,282	150,000				
(支出小計)	752,478	904,000	(収入小計)	1,804,272	549,300	
次期繰り越し金	2,160,296	753,802				三菱東京UFJ　2,160,296円
合計	2,912,774	1,657,802	合計	2,912,774	1,657,802	

針葉樹会平成25年度遭難対策基金決算(案)

（平成25年6月1日―26年5月31日）

支出			収入			
項目	実績	予算	項目	実績	予算	
支出	0	0	前年度繰越	3,242,719	3,242,719	
			うち遭難対策基金	2,342,719	2,342,719	
			うち遠征基金	900,000	900,000	
			利息他	648	600	
(年度内実支出　小計)	0	0	(年度内実収入　小計)	648	600	
次年度繰越	3,243,367	3,243,319				
うち遭難対策基金	2,343,367	2,343,319				
うち遠征基金	900,000	900,000				
合計	3,243,367	3,243,319	合計	3,243,367	3,243,319	三菱東京UFJ定期預金　3,243,367円

針葉樹会平成26年度　一般会計予算（案）　　2014. 07. 14

（平成26年6月1日～平成27年5月31日）　　（単位　円）

支出			収入			
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績	
会報発行費	400,000	328,850	前年度繰越	2,160,296	1,108,502	会報は年3回発行を予定
山岳部補助	200,000	100,000	納入会費	500,000	1,694,100	学生部員の増加に伴い装備等の購入が必要
通信連絡費	30,000	15,962	（普通会費）	(400,000)	(493,000)	
慶弔費	30,000	4,882	（賛助会費）	(100,000)	(1,201,100)	慶弔費は過去の実績を勘案し計上
学生保険補助	54,000	30,900	会合余剰金	30,000	30,015	学生部員20人を想定
日本山岳会会費	12,500	36,420	預金利子・利息	200	157	日本山岳会会費26年度分
Home Page 年間維持経費	70,500	70,420	会報販売代金	0	0	
図書関係費用	20,000	14,762	寄付金	0	80,000	部室にある部誌の製本を予定
芦安登山道整備	150,000	150,282				芦安登山道整備第3次計画
富士山登山補助	150,000	0				一般学生募集富士登山第2次計画
学生登山研修補助	100,000	0				学生部員の国立登山研修所等の研修への
						参加費用を一人2万円限度で補助する。
(支出小計)	1,217,000	752,478	(収入小計)	530,200	1,804,272	
次年度への繰越	1,473,496	2,160,296				
合計	2,690,496	2,912,774	合計	2,690,496	2,912,774	

針葉樹会平成26年度遭難対策基金予算(案)

（平成26年6月1日～平成27年5月31日）

支出			収入			
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績	
支出	0	0	前年度繰越	3,243,367	3,242,719	
			うち遭難対策基金	2,343,367	2,342,719	
(年度内支出　小計)	0	0	うち遠征基金	900,000	900,000	
			利息他	600	648	預金金利　0.018%を想定
次年度繰越	3,243,967	3,243,367				
うち遭難対策基金	2,343,967	2,343,367	(年度内収入　小計)	600	648	
うち遠征基金	900,000	900,000				
合計	3,243,967	3,243,367	合計	3,243,967	3,243,367	

学内の認知度の向上・部員確保のため、一昨年に続き第2回の富士登山を8月24日、25日に実施する。今回は事前講習会として佐薙さん講師で「富士山の自然と世界遺産」をテーマに講演を企画し、さらに学内認知度向上を図りたいと思っている。予算は、参加者の費用負担増、消費税・入山料追加等を考慮し15万円をお願いしたいと思う。(講習会は7月1日16時10分より　国立東館１２０１教室)

⑶懇親山行
①春の山行(6月7、8日)　八ヶ岳トレール(アダージオ合宿)
②夏の山行(7月26、27日)　越後シリーズ(坂戸山、弥彦山神社)
③秋の山行(12月7日)　富士山の展望を楽しむ。(清八山または滝子山)
④冬の山行(2～3月)　場所未定

⑷会合
①幹事会　6月4日
②富士登山説明・講演会　7月1日
③総会　7月14日
④月見の宴　11月1日(土)
⑤新年会　1月
⑥新緑の宴　4月～5月
⑦三月会　毎月、第三月曜

⑸出版物
『針葉樹会報』の発行
１３０号　２０１４年7月発行予定
１３１号　２０１４年10月発行予定
１３２号　２０１５年2月発行予定

⑹図書
①山岳部室蔵書の管理(部誌の製本)
②山岳部室蔵書の管理(保管／破棄の仕分け／整理)

⑺ホームページ
①ＨＰ(開設後略6年経過)の見直し

4．平成26年度役員改選

異動のみ記載(全員のリストは当ＨＰの『針葉樹会会員資料』―『名簿』―「針葉樹会組織」参照)

●幹事
会報幹事　松田　重明(昭53：新任)
山行幹事　岡田　健志(昭44：新任)
学生幹事　兵藤　元史(昭52：退任)
古田　茂(平7：新任)

5．平成26年度予算及び遭難対策基金収支見込み(別紙参照)

6．学生の活動状況

部員氏名	学部学年／役職	出身高校
町田　広樹	法学部4年	International School of Bangkok
長島　弘賢	商学部4年／部長	日比谷
伊藤　久裕	商学部4年／副部長	大垣北
吉川　悠太	商学部4年	岡山朝日
原　萌子	社会学部3年／会計	国立
渡辺　顕志	経済学部3年	津
高橋　直道	法学部3年	栄光学園
パク　チェヨン	法学部3年	(留学生)
西山　祥紀	経済学部3年	鎌倉学園
太田　貴之	商学部3年	浜松北
辰川　貴大	法学部2年／新歓	山手学院
中野　広美	商学部2年	小石川
上　茂衡	法学部2年	札幌東
大谷　彩子	商学部2年	順天
岡田　尭之	経済学部2年	九段
鈴木　陽介	社会学部1年	三田
大矢　和樹	法学部1年	昭和学院秀英

7．その他

▽山の歌『山恋しくて鳳凰三山』の紹介……
上原　利夫(昭33)

当ＨＰの『サロン』―『山関係随筆』に「南アルプス国立公園指定五十周年記念事業で出番を得た、山の歌『山恋しくて鳳凰三山』が掲載されています。当日、その概要が紹介され、『山恋しくて鳳凰三山』の合唱録音と編曲ソロ録音が披露されました。

▽山岳部・針葉樹会の歩みスライド写真……

岡田　健志（昭42）

昔懐かしい合宿（１９５７～１９６５）、50周年記念集会（１９７２）、新旧部室、最近２年間の山行などの写真がスクリーンに映されました。

▽物故会員の遺贈アルバムの回覧

先日、昭和37年卒の朝木大統氏、大建二郎氏のご遺族から写真アルバム各1冊が針葉樹会に遺贈されました。それを席上回覧しました。

▽病が癒えて久しぶりに総会に出席された元石原会長から、会費免除規定やご自身の山登りを振り返ってのコメントをいただいた。

（総務幹事・高崎俊平記）

●会員の近況報告（総会告知への返信より）

特別会員　**鈴木羊三**　相変わらず目医者をやっております。

昭23　**伊藤恙生**　何年か前にＮＹから帰国以来鳴かず飛ばずの生活です。風邪ひとつひいたこともなく、元気よく暮らしております。

昭28　**海老澤齊**　中樹会の仲間も３人まで減少して残念です。最近は学生も増えて結構なことと存じます。よろしく。

昭31　**高崎治郎**　お陰様で元気です。

昭31　**尾身幸次**　ＳＴＳフォーラム（科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム）を主催しているため、４割ほど海外に出張しています。

昭33　**新井慶司**　80才となりましたが、毎日毎日どうにか元気で過ごしております。７月９日～17日の日程でヨーロッパ旅行に出掛けます。妻と二人旅ですが、楽しく行って来るつもりです。

昭33　**小林博**　介護から解放され、一人身生活をエンジョイして元気です。

昭34　**市川陽一**　従前と変わりありません。近くの里山及びその奥の「京都北山」の散策に精を出して居ます。また年に２回程アメリカの山（軽い山登りです）にも出かけて居ります。

昭36　**有賀盈**　いよいよ梅雨入りかと思ったら一挙に夏が来たようでここ松本も30度前後の日が続いています。そんなわけで家庭菜園の畑仕事に精出しています。

昭36　**石弘光**　特に変わりなく元気にやっています。

昭36　**小林正直**　相変わらず車いすの生活を続けています。

昭38　**多田伸二**　ウォーキングとゴルフと社労士仕事を楽しんでいます。

昭39　**蛭川隆夫**　昨年末の冠動脈バイパス手術を経て、後遺症がまだ残るものの、ぼちぼち健康の回復につとめているところです。

昭39　**竹中彰**　本年の日本山岳会東京多摩支部の総会で引続き支部長を続けざるを得なくなりました。相変わらず幹事会、５周年ＰＴなどの会議や３年目に入った登山教室ＰＴのサポートで近郊の山を歩いています。本年度から本部に代って、都岳連加盟団体になり、この関係の付き合いも増えそうです。なお、一部の方にお願いしているメトロ会の総会は本年は９月25日に設定しております。宜しくご予定の程お願い致します。

昭39　**中橋寿雄**　足腰の不調のため、あちこ

ち出歩くことはできませんが、無理のない範囲で、「むだなこと」をいろいろと楽しんでいます。「酔生夢死」にまた一歩近づきました。

昭41　**坂井溢弘**　お蔭様で元気です。相変わらず箱根の山で山霧と遊んでもらっています。諸行事が「拡充」の方向に向かっている様に見受けられ、各位のご努力に遠く敬意を表して居ます。

昭41　**池知昭洋**　ともかく元気にしております。

昭43　**中村雅明**　ＦＮ短大山行主催者の一員でいやおう無しに山に精出しています。お蔭で若い学生さんに元気をもらって前より強くなったかも。短大夏休みの８月初に加賀の白山に行きます。９月にはカラコルム・フンザ～西域南路の旅も予定しています。

昭46　**金子晴彦**　８月末の北岳バットレスに備えて藤原さんから備中用瀬で月１回の特訓を受けています。

昭51　**藤本敏行**　現在、在上海であり、７月は帰国の予定ありませんので、総会は欠席致します。日中間の問題、ＰＭ２．５等々色々ありますが、新疆ウイグル、雲南などを折々訪ね、中国を楽しんでおります。

昭51　**加藤博行**　新潟で元気にしております。ご盛会をお祈りします。７月には、越後シリーズで当地へ来られる会員の皆様と粟ヶ岳へ登る予定です。

昭55　**岡部寛史**　本日、ブラジル－ドイツ戦、明日はオランダ－アルゼンチン戦といよいよ決勝に向かって４強が鬩ぎ合うステージとなって来ました。小生は、Ｃｕｉａｂａでの日本－コロンビア戦を観戦して打ちひしがれたのみで、後は自宅のソファーに寝転んでの自堕落なビール応援に終始しており、臨場感あふれる観戦記は山本くんに譲るのが得策かと思います。彼とも、久々に一献をと思っていましたが、残念ながら叶いませんでした。また、機会もあるでしょう。遠い国ですが、来伯の機会には是非お立ち寄り願えれば歓待申し上げます。

昭56　**中西茂**　当方、あと３年で60歳の定年を迎えますが、65歳までは仕事が中心、65歳以降は山釣り等中心で生活をしていこうと思っております。

昭59　**石川保典**　ロンドン赴任が２年目に入りました。

昭59　**山本礼二郎**　Ola! Bon dia! 結局のところ、私はブラジル各地を転々としております。日本対ギリシャ戦からブラジルに入るはずだったんですが、18日ＵＳＡの雷嵐でマイアミで足止めをくらいギリシャ戦終了の５時間後の深夜１時過ぎにナタル入りしました。その後はフォルタレザでドイツ対ガーナを観戦し、クイアバへ渡り１日だけパンタナール大湿原ツアーに行った翌日にコロンビア戦を観戦しました。本当に残念でしたね。虚脱感というやつに襲われております。本日ブラジリアに入りまして明日にはポルトガル対ガーナを観戦します。ずっと私１人で行動してきましたが、その翌日には日本から遅れて息子もブラジル入りしまして、リオデジャデネイロに行き、28日の決勝トーナメント１回戦ウルグアイ対コロンビアを観戦し、翌29日朝早くレシフェへ飛び、本来なら日本が２位通過して出場しているはずの決勝トーナメント１回戦ギリシャ対コスタリカを観戦し、翌30日に帰路へつきます。日本到着は７月２日ですね。もしかして、岡部先輩も28日リオまたは29日レシフェへ観戦へ行くとかはないですよね！（笑）。かかる強行軍で飛び回っておりまして先輩との一献は残念ながら難しそうですが、ブラジルをぐるりと巡り、発展振りに驚きました。24年ぶりのブラジルなんですが、本当に変わりました。この地でのお仕事はさぞエキサイティングだろうなあ、と想像しております。石丸さんが今度インドに赴任するそうで日本へ

戻ったら7月に送別会をします。

昭59　**稲毛尚之**　学生も増えているとのこと、大変嬉しく、頼もしく思います。

平6　**田形祐樹**　信頼できるプロフェッショナルをご紹介できます……税理、保険、建築、印刷、投資、自動車などなど。

平22　**糟谷知紀**　富士通で営業をしております。今年の1月に出張で富山に行ってきました。夕日に焼ける立山連峰が大変綺麗でした。

平26　**峯弘卓**　山陽新幹線小倉駅運輸管理係として働いております。駅員という、なかなか特殊な形態で社会人生活をスタートしましたが、元気にやっております。

■会費納入のお願い

平成26年度（26年6月～27年5月）の会費納入をお願いいたします。

会費（普通会費）は卒業年次に関係なく、一律５０００円です。（ただし、昭和29年度以前卒業の会員は従来通り会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず賛助会費を募集しております。賛助会費は一口１０００円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっておりますので、その資金手当てのためにも、賛助会費へのご協力をお願い申し上げます。

◎会費納入先◎

三菱東京ＵＦＪ銀行　赤坂支店

口座名　針葉樹会

口座番号　普通４８２５６４７

＊振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入してください。

会計幹事　佐藤久尚

編集後記

▽この夏も会員・現役部員共に色々の山に入ったようです。お陰様で沢山の会員から寄稿頂き、今回も内容のある会報がお届けできたかと思います。

数々のエピソードを残し、針葉樹会の名物懇親山行となっている越後シリーズですが、今年は猛暑に阻まれ全員沈没の粟ヶ岳、雨と風が荒れ狂った弥彦山と散々の結果でしたが、地元の加藤会員が宿に沢山の越後の酒を持ち込んでくれて懇親会は話が弾みました。その結果が今回の「上越後の山、海、風土」の力作になりました。これで今後も懇親山行・越後シリーズはまだまだ続きそうですね。

また本間さんの報告のとおり引き続きＦＮ短大の山行は藤原会員、中村（雅）会員、宮武会員のご努力で盛会が続いています。そのリーダーの藤原さんがそのエネルギーの源泉の一端を明かしてくれました。共に味わい深い寄稿です。北海道山行・白山山行とともに楽しく読んでいただけるかと思っています。（小島）

▽今年の秋は奥多摩だけでなく、どこもドングリなどの木の実が不作だと聞きます。鳩ノ巣あたりで眺めても、柿や栗、ユズなどが去年に比べてみな成りが良くありません。そのせいか、クマの目撃情報が増えています。９月28日、御嶽山噴火で世間が大騒ぎしていた時、奥多摩では川乗山頂上直近で登山者が登山道に突然現れたクマに頭をかじられ、ヘリで病院に運ばれるという騒ぎもありました。天気の良い日曜日の昼めし時、頂上付近には大勢の人がいたという状況でのクマ襲撃です。

10月下旬、全国わさび生産者大会が島根県益田市で開かれ、現地見学で中国山地深奥の匹見町のわさび畑を見に行きましたが、その辺りではクマに出くわすのは珍しくないと言っていました。クマがわさびを食うことはありませんが、わさび田にいる沢ガニなどを探して、田や石垣をほじくり返してメチャクチャにすることがあります。そんな天然ものばかり食べていたクマが、人間が捨てる食べ物の味を覚えたので人を恐れず近づくようになってしまったのが川乗山の事故の遠因かもしれません。いずれにしろクマが冬眠に入るまで、人里に近い奥多摩の山でも熊鈴は必携品です。（井草）

▽９月の３連休に涸沢で久しぶりにテント泊をしました。宮武さん、学生さんと同じ日程です（行動は別）。

こちらは針葉樹会とゆかりの深い女性２名と一緒で、お二人はテント泊は初めて。横尾経由で入下山、涸沢に２泊して、中日はザイテンから奥穂をめざす予定でした。ところが、この連休は異様に混んでおり、ザイテンの上りですでに渋滞。奥穂の渋滞ぶりも見てとれたため、混雑を避けるために、急遽、涸沢岳～北穂～南陵ヘルートを変えました。

ところがこちらも大渋滞。涸沢岳から北穂へ向かう最初の断崖の下り口で20分ほど待ったというだけでも、その混雑ぶりを想像していただけると思います。行程自体はさほどハードではなかったはずなのに、胃が痛む思いだったせいか夜のカレーがまったく食べられず、自分でも驚きました。

現役時代から今に至るまで、ほとんど「非リーダー」として山に行って来ました。やはりリーダーは違います。そのことをつくづく実感し、現役時代および卒業後の山行リーダーを務めてくださったみなさまへ、感謝の気持ちを新たにしました。幸い、今回のメンバーと次のテント泊山行をめざす話が続いています。新たな展開にドキドキしつつ、前向きに夢をふくらませています。（川名）